

名島城跡 2

—第2次・第3次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第938集

2007

福岡市教育委員会

NA

JIMA

JYOU

ATO.

名島城跡 2

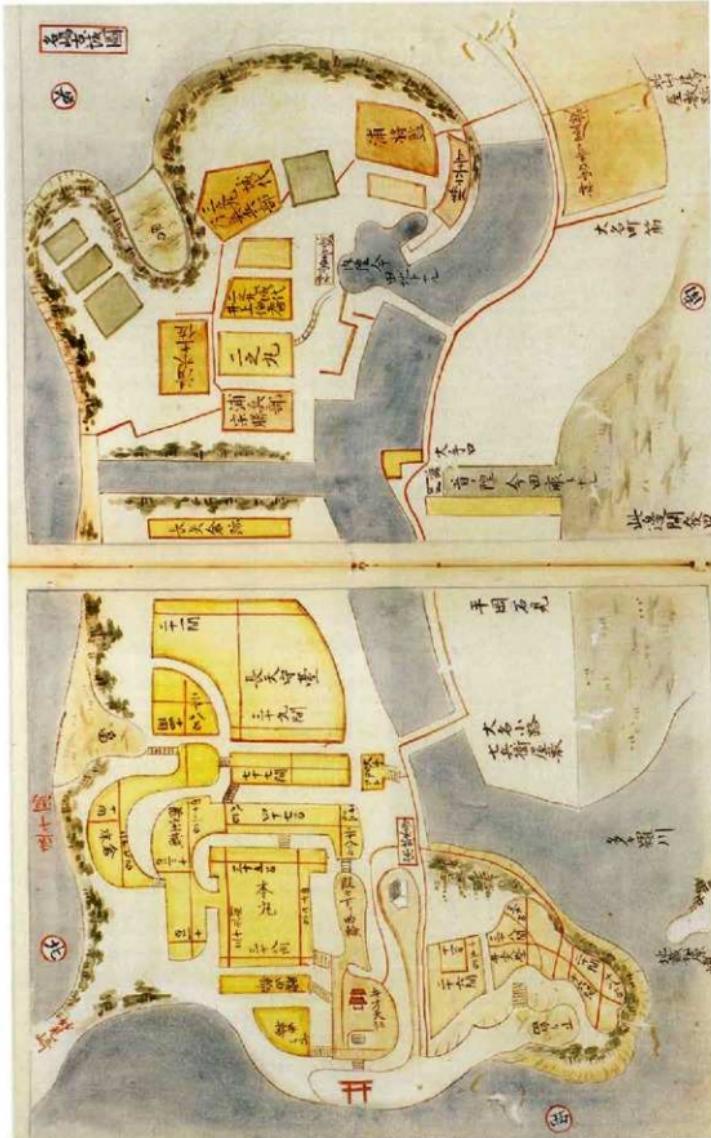
—第2次・第3次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第938集



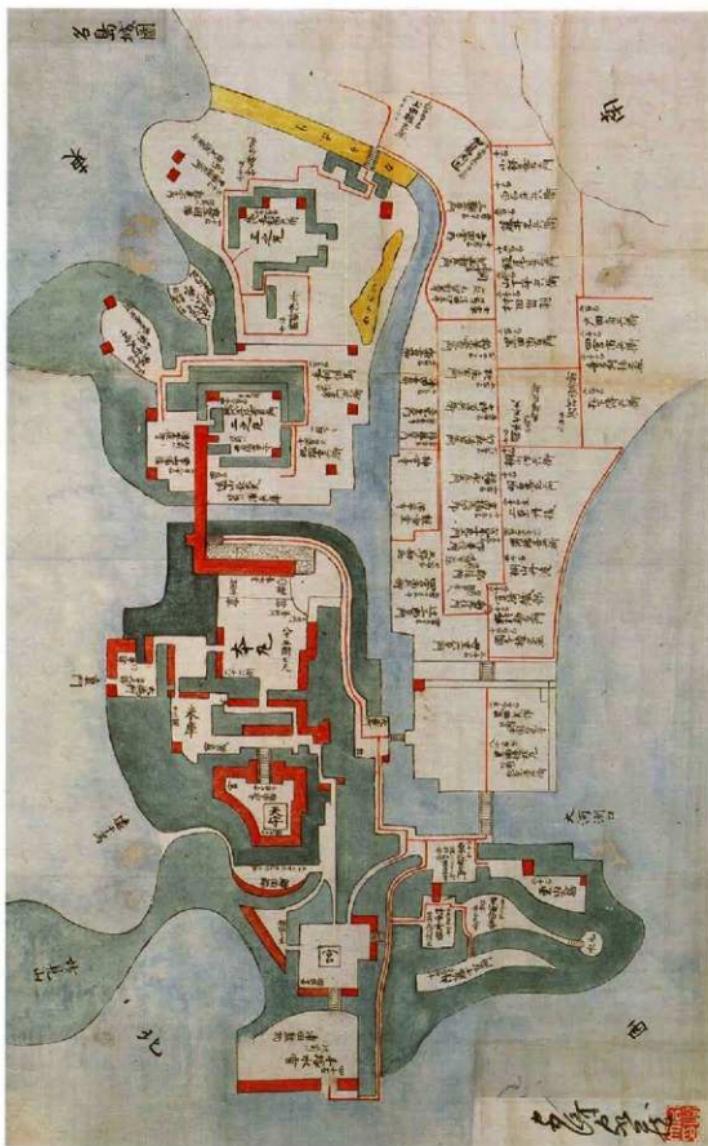
調査略号 NZE-2.3
調査番号 0433.0506

2007

福岡市教育委員会



名島古城図 「筑前国統風土記附録」所収 平岡家所蔵 フィルムは福岡県立図書館保管



名島城図 宮崎家蔵 福岡市立博物館所蔵



1. G地点本丸大手石垣（南西から）



2. C地点隅櫓基礎（南東から）



序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきました。この地の利を活かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、各時代とも重要視されているところです。

本調査地点は九州において最も早く近世城郭の技術を採用したといわれる名島城の本丸に位置しています。名島城は五大老にもなり秀吉に重用された小早川隆景が筑前国を治める居城でした。また、秀吉の朝鮮侵略に際してはその中核基地となった名護屋城を支援する軍事拠点としての機能も持ち得ていました。しかし、関ヶ原の戦い以後、黒田如水、長政が転封されると時代の推移にあった福岡城に居城が移されることになり、名島城はその役割を終えることとなりました。現在、宅地化が進み城の姿が見えにくくなっていますが、このような激動の世を生きぬいてきた武将たちの姿を映し出す多くの遺構が地下に眠っていると考えられます。

今回の調査は公園整備に先立って保存を前提に実施し、本丸大手の石垣や隅櫓など重要な遺構の一部が発見されました。本書はこうした成果を収めたものであり、研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた名島城址保存整備期成会会長 真田 長夫様、名島神社神職 原田 光雄様、氏子総代会会长 真田 治男様、名島公民館館長 吉村 弘光様はじめ関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例言

- 本書は福岡市東区名島1丁目地内において公園整備に先立って都市整備局からの令達事業として福岡市教育委員会が2004、2005年度に実施した発掘調査報告書である。
- 調査は荒牧宏行が担当し、遺構図面作成は荒牧、藤野雅基、小野千佳、高手興志子が行い、遺構写真撮影は荒牧が行った。
- 本書に掲載した遺物実測は濱石正子、相原聰子、荒牧、浄書は濱石正子、大石菜美子、荒牧、遺物写真撮影は有限会社 文化財写真工房に委託し岡 紀久夫氏が行った。
- 本文は荒牧が執筆、編集した。
- 本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

凡例

- 本書掲載の遺構図座標は現況測量に基づく任意のものである。I-(3) 参照。方位は旧日本測地系により真北より $0^{\circ} 19'$ 西偏する。
- 掲載した遺物は通し番号を付した。名護屋城の出土瓦との比較は以下の文献による。

後藤宏爾 1996「名護屋城跡出土の軒平瓦」『研究紀要』第2集 佐賀県立名護屋城博物館

宮崎博司 1997「名護屋城跡出土の軒丸瓦」『研究紀要』第3集 佐賀県立名護屋城博物館

宮崎博司 1999「肥前名護屋城跡出土の筒瓦」『研究紀要』第5集 佐賀県立名護屋城博物館

遺跡調査番号	0433	遺跡略号	NZE-2
地番	東区名島1丁目2405外	分布地図番号	0115 名島32
開発面積	7,048m ²	調査面積	571m ²
調査期間	平成16年7月1日～9月1日		

遺跡調査番号	0506	遺跡略号	NZE-3
地番	東区名島1丁目2405外	分布地図番号	0115 名島32
開発面積	7,048m ²	調査面積	790m ²
調査期間	平成17年4月11日～6月21日		

Ph.1	名島城周辺航空写真	5
Ph.2	名島城周辺航空写真 昭和28年撮	7
Ph.3	名島古代之岡 青柳種信関係資料 福岡市立博物館所蔵	8
Ph.4	筑前名島城 原田宗種 種美作 福岡市立博物館所蔵	8
Ph.5	本丸調査区全景（南東上空から）	10
Ph.6	A地点No.2トレンチ（南東から）	12
Ph.7	A地点No.3トレンチ（北東から）	12
Ph.8	A地点No.3トレンチ出土遺物	15
Ph.9	A地点No.5トレンチ石垣（西から）	16
Ph.10	A地点No.6トレンチ石垣（南西から）	16
Ph.11	A地点No.6トレンチ石垣（西から）	16
Ph.12	B地点全景（南上空から）	17
Ph.13	B地点No.2、3トレンチ（南から）	18
Ph.14	B地点No.4トレンチ（南から）	18
Ph.15	B地点No.2トレンチ土層（南西から）	20
Ph.16	C地点全景（東上空から）	21
Ph.17	B地点No.4トレンチ石垣からC地点十層（東から）	22
Ph.18	B地点No.4トレンチ石垣（北から）	22
Ph.19	C地点検出隅棊基礎（南から）	24
Ph.20	方形区画内の敷石と礎石（西から）	24
Ph.21	C地点出土遺物	26
Ph.22	D地点出土遺物	28
Ph.23	E地点検出集積（南から）	29
Ph.24	F地点全景（西上空から）	31
Ph.25	F地点トレンチ北壁土層（南西から）	31
Ph.26	F地点全景（内から）	32
Ph.27	本丸中央部出土瓦	33
Ph.28	本丸中央部出土サキノミ	34
Ph.29	G地点と東辺塁壁（北西上空から）	35
Ph.30	G地点大手石垣（南から）	36
Ph.31	G地点大手石垣（西から）	36
Ph.32	G地点大手石垣（南西から）	37
Ph.33	G地点出土軒丸瓦当	38
Ph.34	G地点出土軒平瓦当	40
Ph.35	G地点出土軒丸瓦（丸瓦部）	42
Ph.36	G地点上層出土軒平瓦当	44
Ph.37	名島城跡表採瓦1	46
Ph.38	名島城跡表採瓦	46
Ph.39	名島城跡表採瓦2	47

本文目次		
Iはじめに	1	2. 遺構と遺物 10
1. 調査に至る経過	1	(1)A地点の調査 10
2. 調査の経過	1	(2)B地点の調査 17
3. 調査体制	2	(3)C地点の調査 21
II位置と環境	2	(4)D地点の調査 28
1. 地形	2	(5)E地点の調査 29
2. 名島城に関する資料について	2	(6)F地点の調査 31
3. 絵図について	5	(7)中央部の調査 31
III調査の記録	10	(8)G地点の調査 35
1. 基本層序	10	(9)表採資料 44
		IVおわりに 48

挿図目次

Fig.1 名島城跡位置図 (1/20万)	3
Fig.2 名島城跡現況図 (1/6,000)	4
Fig.3 名島城跡地形図 (1/6,000 昭和初期)	6
Fig.4 名島古代之図 青柳種信関係資料 福岡市立博物館所蔵	8
Fig.5 築前名島城 原出宗種 種美作 福岡市立博物館所蔵	8
Fig.6 名島城跡調査区配置図 (1/800)	11
Fig.7 A地点No.1~4 トレンチ (1/60)	13
Fig.8 A地点No.3 トレンチ出土瓦実測図 (1/4)	15
Fig.9 A地点No.5, 6 トレンチ検出石垣実測図 (1/60)	16
Fig.10 B, C地点 トレンチ配置図 (1/200, 1/80)	19
Fig.11 B地点No.4 トレンチ検出石垣と上層図 (1/60)	23
Fig.12 C地点検出隅櫓構造図 (1/60)	25
Fig.13 C地点出土瓦実測図 (1/4)	26
Fig.14 D地点出土瓦実測図 (1/4)	28
Fig.15 E地点 トレンチ実測図 (1/60)	30
Fig.16 F地点 トレンチ実測図 (1/100)	32
Fig.17 中央部出土瓦実測図 (1/4)	34
Fig.18 中央部出土サキノミ実測図 (1/4)	34
Fig.19 G地点検出大手石垣 (1/60)	38
Fig.20 G地点出土瓦実測図 1 (1/4)	39
Fig.21 G地点出土瓦実測図 2 (1/4)	41
Fig.22 G地点出土瓦実測図 3 (1/4)	42
Fig.23 G地点出土瓦実測図 4 (1/4)	43
Fig.24 G地点出土瓦実測図 5 (1/4)	44
Fig.25 表採瓦実測図1 (1/4)	45
Fig.26 表採瓦実測図2 (1/4)	46
(写真)	

巻頭図版1 名島古城図 「筑前国統風土記附録」所収 平岡家所蔵

巻頭図版2 名島城図 宮崎家蔵 福岡市立博物館所蔵

巻頭図版3 1. G地点本丸大手石垣（南西から） 2. C地点隅櫓基礎（南東から）

Iはじめに

1. 調査に至る経過

本調査地点は福岡市東区名島1丁目地内に所在する。当該地は近世城郭名島城の本丸に位置する。

名島城は天正十六年、筑前国に配された小早川隆景の居城として築造された。その後、黒田長政に引き継がれるが、海に面した要害の地は時代に即さず現在の福岡城に居城を移すことになった。廃城となった後の名島城の変遷を知る近世史料はほとんど無い。近代以降になると明治44年の地図、昭和初期の地図では山林の標記となっている。この本丸部分は先の第2次世界大戦中には烟として開墾され、戦後の昭和35年に民間の住宅が建設されるに至ったと聞く。近年、転居されるに至り跡地の公園化計画が浮上し、福岡市都市整備局が買い取ることになった。

平成14年6月17日、福岡市都市整備局公園建設課より公園整備に伴って当該地の埋蔵文化財の確認調査を依頼する文書が埋蔵文化財課に提出された。これを受けて当課では書類審査を行い、平成14年10月16日に試掘調査を実施したが土地改変が大きく遺構の確認は判然としなかった。しかし、絵図等からも天守をはじめ中心的な施設があったことが明らかであるために、展望台等の公園施設が予定されている範囲を中心に平成16年7月1日より第2次発掘調査を開始することになった。

2. 調査の経過

名島城跡の調査は共同住宅建設に伴う平成2年の本丸北東隅の調査を第1次とし、今回の公園計画に伴う発掘調査は第2次から始まる。報告する第2次調査は平成16年7月1日～同年9月1日まで、第3次調査は平成17年4月11日から同年6月21日までの期間で実施した。

第2次調査では公園施設としての階段を設置する予定地の名島神社から曲輪へ上の進入路や展望台建設予定地の曲輪北西部の発掘を実施し、あわせて曲輪の形状を確認するために名島神社内を踏査し、石垣の確認を行った。また、切り下された曲輪北半のトレレンチ調査を行い切土の形状や北西部の石垣を検出するとともに中央部を広く表土剥ぎし、構造検査を行った。さらに第3次調査でも中央部の調査を進めたが、第2次調査以来、宅地造成による客土を築城によるものと誤認し、北西部で検出された石垣の土層を観察するに至って客土、旧表土下のおよそG.L.-70cmから遺構が検出されることが判り、予定期間の終了近くであったが、北西部の隅櫓の基礎を検出することができた。また、第3次調査では曲輪東辺際の進入路に沿った壁面を切り下げたいという近隣からの要望から調査を行い、大手石垣を検出した。

このように第2次、第3次調査は都市整備局からの令達事業（公園整備費）として公園計画を念頭において調査区を設定していったが、予想外に遺構が残っていることや名島城が九州における近世城郭の始まりの城という歴史的に重要な位置に置けることから今年度（平成18年度）の第4次調査から国庫補助事業の重要遺跡確認調査に切り替え本丸の全体を確認していくことになった。

この項の最後になるが名島城跡の公園整備計画が浮上して以来、都市整備局公園建設課とは協議、連絡を重ね、調査成果を生かした公園整備計画を立案する趣旨のもとに協力体制を布き、地元の名島城址保存整備期成会、自治会連合会、名島神社をはじめとする役員、関係者各位の方々とも公民館において説明会を重ね公園整備に対するご要望をうかがうとともに名島城に関するご教示や調査への御協力を多大に賜ったことを感謝し特記する次第である。地元の方々の歴史を掘り起こし大切にして現代にも生かしていく気運は高く、近年、資料を出し合って編集を重ね貴重な成果が実り『故郷名島の歴史』が平成17年に発刊されたことをここに記しておく。

3. 調査の方法

都市整備局において委託され作成された現況測量図をもとに、調査位置、高さを決め遺構図等を作

成した。従って本報告書に記載した座標は現況測量に使用された4級基準点測量による成果表をもとにしている。高さは測量における仮の高さを基準にしていたので、標高に合わせるために成果表から17.9mを差し引き表示した。

4. 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

【調査主体】福岡市教育委員会 【調査総括】埋蔵文化財課長 山口謙治 調査第2係長 池崎謙二
（前任）山崎龍雄【庶務】文化財整備課 鈴木由喜 【試掘調査・協議】事前審査係長 濱石哲也
担当 井上薫子（前任）星野恵美 【調査担当】荒牧宏行 【調査作業員】黒瀬千鶴 武田潤子 安
高精一 藤野雅基 小野千佳 二宮白人 高手與志子 兼田ミヤ子 酒井次憲 豊丸秀仁 永田八重
子 渋谷留雄 濱フミ子 安高邦晴 知花繁代 坂本久幸 沖政芳 松若俊美 内山和子【資料整
理】濱石正子 松下伊都子 小金丸昌世 大石菜美子 相原聰子

II 位置と環境

1. 地形

名島城は博多湾に面した丘陵に築かれた、いわゆる海城である。南側には多々良川の河口が広がる。この要害を利した丘陵上に東から西へ三の丸、二の丸、長天守臺、本丸（『筑前国統風土記附録』所収の名島古城図による）の曲輪が続く連郭式の縄張をとる。東西延長は約760mの規模で西際の本丸からは南側の名島神社へ折れて延びる。

縄張が良く見てとれる昭和初期の地図では三の丸から二の丸にかけては標高15.4m前後の平垣面が成形され、長天守臺、本丸と高くなり、本丸は標高21mが示されている。但し、現在の地図では本丸の標高は24.8mとなっているので3.8mの差がみられる。後述するように本丸は七地造成された折、およそ110cmの各十が盛られているがこれを差し引いた開きは基準の差と誤差が考えられる。

絵図には二の丸と長天守臺の間に掘切がみられ博多湾に通じているが、昭和初期の地図でも幅約20mの水路が明確にみられる。この水路は昭和3年に国際飛行場（水上飛行場）が建設された折、その開削工事中に石垣と金箔が施された甌瓦をはじめとする遺物が出土したことが報告されている^⑩。この甌瓦の所在は現在不明である。なお、この記載から地図が飛行場が建設される昭和3年以前の測量であることが判る。

Ph.2は昭和28年の名島城跡を写したものであるが、掘切の左側（西側）がこの飛行場建設で大きく開削されているのが判る。また、この写真では調査対象となった本丸の南西部が高くなり、傾斜して東側へ張り出している。後述の絵図にみられる北東部の出角はみられない。

2. 名島城に関する資料について

名島城に関しての史料については「名島城跡1」^⑪に詳しいので、ここでは考古資料と絵図について若干ふれておきたい。

名島城は秀吉の九州平定後に伊予より筑前国に配された小早川隆景が天正十六年（1588）より築きはじめた近世城郭である。ほぼ同時期に九州においては黒田如水、長政によって中津城（大分県中津市）、小西行長によって麦島城（熊本県八代市）の築城を開始した。これらの城郭は九州に安土城以来の近世城郭の技術を採り入れていく先駆けとなった。

小早川隆景の筑前入州に際して、最初は近接した立花城を居城とした。立花城は難攻の山城で派生する丘陵に曲輪が連続する。戦国期には大友方の拠点の城郭として本家の毛利氏とともに攻めてきた小早川隆景とも立花城の争奪が繰り広げられた。



Fig.1 名島城跡位置図（1/20万）

名島城は立花城から直線にして約2.7km離れ、戦国期には立花城の端（支）城であったという。小早川隆景は間もなく統治面により遡し、主力の水軍力も生かせる博多湾に面したこの名島城に居城を移し、立花城には重臣の乃美宗勝（浦兵部）を置いた。

立花城の本格的な発掘調査は行われていないが、瓦等が表採され、石垣や虎口の状況が一部見てとれる。瓦の表採資料では大友氏の家紋である杏葉文軒丸瓦を含め名島城出土の瓦より古式のものが受けられる。しかし、今後、名島城と同范の瓦が出土する可能性は当然考えられ、また、名島城からも支城として機能していた人友氏の時代の瓦が出土することも考えられる。未詳であるが名島城出土といわれる杏葉文の瓦がある。城郭施設については踏査から小早川氏が立花城に入城すると石垣等の大改修が行われたという見解がある¹⁰⁾。

名島城は領国統治とともに秀吉の意向もあって朝鮮出兵の拠点となった名護屋城を支援する役割を負っていた。そのことを示すように名護屋城川上と同范とみられる瓦が比較的多くみられ、今回の調査でも新たに同范の可能性がある瓦当が出土した。また、黒田氏の入城後も改修されたとみられ、第1次調査では黒田氏の特紋である櫛文の軒丸瓦が出土している。但し、名島城の居城としての機能が失われた後も名島神社への可能性が表採資料や今回の調査で出土したように藤巴文を含む瓦が供給され続けられているので注意を要する。

同范と考えられる瓦当が名島城、福岡城、名護屋城、岩国城にみられるという¹¹⁾。福岡城出土のものは個人コレクションであるので未詳であるが乘安氏はのことから福岡城の築城が始まった後も名島城の補修は行われ、岩国城とは毛利家存続をめぐって黒田長政と吉川広家との強い関係がみられる



Fig.2 名島城跡現況図 (1/6,000)



Ph.1 名島城周辺航空写真

ように黒田氏の瓦師が活動する博多からの供給を考えられている。

福岡城の築城が始まると「名島引け」といわれるよう名島城の建物や石垣が解体され運ばれたという。この折、名島城の瓦が福岡城に運ばれ使用されたことは推測に難くない。福岡城月見櫓からは秀吉との結びつきを表すと言われる桐紋の瓦当が出土し、名島引けの可能性が指摘された。しかし、文様の形状等から福岡城築城時のものという意見がある^⑩。

この他、名島城出土といわれる筥崎宮所蔵の鰐瓦があるが、上記の昭和3年に

長天守臺より出土した鰐瓦が確実なものとして知られる。注目されるのは同じく筥崎宮に所蔵されている鬼瓦で「天正十九年辛卯八月吉日」「大工播州之住稻垣喜左右衛門」の銘がある。小早川隆景は櫓門も建てたといわれ、強い結びつきがみられるが、名島城との瓦師や大工との関係も注意される。

3. 絵図について

大略、家臣の名称から小早川期と後の黒田期のものとする2種の絵図が現存する。前者の主なものとして3種、後者の主な絵図として2種挙げられる。以下、概略を記す。

小早川期

1. 「名嶋古城圖」『筑前国続風土記附録』卷三十五 平岡家所蔵
2. 「名嶋古代之圖」青柳種信関係資料 福岡市立博物館所蔵
3. 「名嶋古城之圖」山口県文書館所蔵 「寛政十一未年七月許斐氏之寫處 再寫ス」の付あり。
4. 「表柏屋郡名嶋古城ノ圖」文化一天保写 内閣文庫 大倉喜太郎献納本 『古戰古城之圖』[筑豊地方古城蹟圖] 4冊47所収^⑪

黒田期

5. 「名島城圖」福岡市立博物館所蔵 「宮崎家蔵」の付あり。
6. 「名島城絵圖」福岡県立図書館蔵 「許斐太平写之 □□□之」
7. 「筑前名島城」福岡市立博物館所蔵 「明治二十四年七月 手塚辰敏氏所有セシヲ借り寫之 原田宗種 全種実」

各期の中では細部に違いはあるものの、概ね同様のものである。しかし、小早川期のものと黒田期



Fig.3 名島城跡地形図 (1/6,000 昭和初期)



Ph.2 名島城周辺航空写真 昭和28年撮「福岡・博多一いま・むかし」図録より朝日新聞社提供

のものは縄張りや曲輪の配置はほぼ同じであるが、後者は石垣が描かれ、墨線の折れや枠形が明確に描かれ描写や絵風に違いがみられる。特に後者は軍学的な感じも見受けられる。

写された時期からみれば、小早川期の1「筑前国続風土記附録」が完成し藩に献上されたのは寛政十年（1798）であるので年号の判る中では最も古い。しかし、2の青柳種信は「附録」の助録を行っているので、種信の関係資料の中に入っている経緯は判らないが、同時期には写されていたものと思われる。黒田期のもので年紀が判るものは7のみであるが、6の許斐太平が小早川期3の許斐氏と同一人物であれば、同じ寛政十一年には写されていた可能性がある。なお、5の宮崎氏は筑前秋月藩の大身の家臣、7の原田家は文政五年（1822）以来、秋月藩の御抱大工を代々務めたという。

細部をみれば、小早川期のものでは絵図は概ね同じであるが、中央下に四万石の家臣や寺院が2、3、4では書かれているのに対し1では欠けている。また、中央上側に2では遠干渴、島、裏御門と記されているのに対し、1では裏御門が欠け、3では遠干渴が欠け、4では「今ハ遠干カタ」と記されている。黒田期の4～6は右下の破損箇所の記載が同じであることから同一の写本から若しくは写されたものを再度写したものと考えられる。しかし、その中でも若干の違いはみられ、例えば三の丸や城下の家臣の名称が4では一部欠落している。以上は差異の一部であるが、今後、内容や制作時期などの検討を重ねてみたい。

（本丸部分について）

今回調査を行った曲輪について絵図から若干の考察を行っておきたい。

小早川期の1、4が「本丸」、2、3は「御本丸」と記されているのに対し、黒田期の絵図では「天守曲輪」と記載され天守が描かれている。大手は全ての絵図が共通し、東辺の南寄りに位置する。この位置は昭和初期の地図からも確認され、3次調査において後述の通り側壁の石垣を検出した。大



Ph.3 (Fig.4) 名島古代之図 青柳種信関係資料 福岡市立博物館所蔵



Ph.4 (Fig.5) 筑前名島城 明治24年7月 原田宗種 種美作 福岡市立博物館所蔵

手から絵図では半入りとなっているが調査では確認していない。また、絵図1と4の北辺中央には北側の曲輪への通路が描かれている。しかし、4の写し元の可能性が考えられた2には無いので写本が他にもあった。曲輪内に記載された辺長の比較は以下の通り。

絵図	東辺	西辺	南辺	北辺	(間)
1	三十五	二十八	四十七	三十九	
2	四十七	三十九			
3	四十七	二十九	三十五		
4	四十七	三拾九	三拾八	三拾五	
5	四十七間余	二十九			
6	四十七間余	二十九			
7	四十七間余	二十九			

2～4、5～7が同じ数値が記載されている。4の付に「山輪々々、朱引及朱間数ハ福岡吉柳氏所蔵下灘周辺ノ所写を以て有也」ことから2から転載されている可能性が高い。また、発掘を進めないと確定できないが、現況では東辺は四十七間に近く、1では東辺と南辺が入れ替わって記された可能性がある。

辺長同様に描かれた曲輪の形状も違いをみせる。すなわち、1が北東隅と南西隅に出角が描かれているに対し、2は北東隅と南西にわずかな出角を描き4、5は北東の出角のみが描かれている。黒田期の5～7では小早川期の2～4と比べ東辺長は四十七間と変わらないが、西辺が十間ほど短くなり北東角へ大きく張り出す。これは2次調査で検出された切土の形状と近似する。

註1) 島田寅次郎 1928(昭和四年)「名島城址」『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第四輯 福岡県

島田寅次郎 1927(昭和三年)「名島城址より出土せし鏡について」『筑紫史談』第四拾五集

註2) 「名島城跡」 1993 福岡市埋蔵文化財調査報告書第318号 福岡市教育委員会

註3) 木島孝之 2003 「筑前立花城跡が語る朝鮮出兵への道程」『城郭史科学』創刊号 城郭史科学会

註4) 乗安 和二三 2004 「岩国城跡出土の雲文瓦をめぐって」『考古論集(河原正利先生退官記念論文集)

註5) 黒田 康 1995 「豊臣時代の桐紋瓦について」『畿島城跡』第2号

註6) 副島邦弘 1982 「内閣文庫 大倉吉太郎献納本について」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』

副島邦弘 1984 「付論 内閣文庫 大倉吉太郎献納本」『筑前秋月城跡』日本市文化財調査報告第17集

Ⅲ調査の記録

1 基本層序

曲輪全体に宅地造成時の客土が60~110cm被せられ、その下層に以前までの表土である黒色腐植土が堆積している。遺構はこの旧表土直下から検出された。

2 遺構と遺物

(1) A地点の調査

本丸南西隅の名島神社から本丸の頂部へ上の入り口にあたる。筑前国続風土記附録の絵図によれば「弁天大社」から本丸へ上の階段状の通路が描かれ、宮崎家蔵の絵図にも「宮」からの通路が描かれている。昭和初期の地形図では名島神社に向かって張り出した傾斜がみられる。この地形は現在まで変わらず残り、およそ27°の勾配で周囲に比べ緩やかな傾斜となっている。このように絵図、地形からもこの地点に名島神社と連絡した通路が敷かれていたことは明らかである。

この名島神社と通じた緩傾斜地を利用し公園施設の階段通路を設置する設計ができた。そのためこの地点の遺構とその検出面の深さを確認するために斜面にトレンチを2本（No.1、No.2）設定するとともに裾尾の豊川稲荷神社参道入り口に露出した石垣根石の可能性がある大石周辺にトレンチ（No.3）を入れた。

No.1、2トレンチでは表土下で栗石がみられるが、木根のため人力では深く掘れず表土下50cmで掘削を中止した。栗石が出土したことから石垣が築かれていたと考えられるが、上述の通り張り出した斜面は緩やかなために、段状となった石垣や絵図のような階段の通路が想定される。



Ph.5 本丸調査区全景（南東上空から）

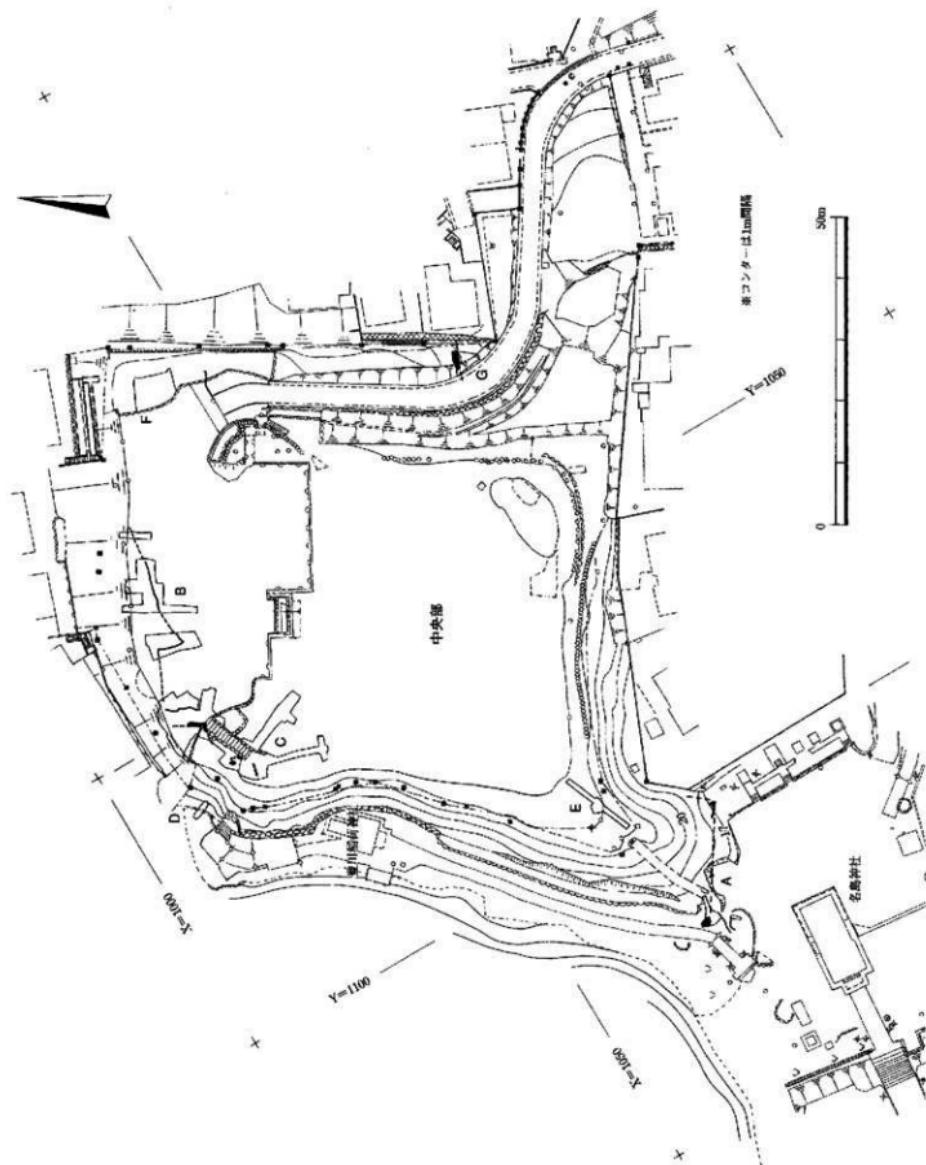


Fig.6 名島城跡調査区配置図 (1/800)



Ph.6 A地点No.2トレンチ（南東から）



Ph.7 A地点No.3トレンチ（北東から）

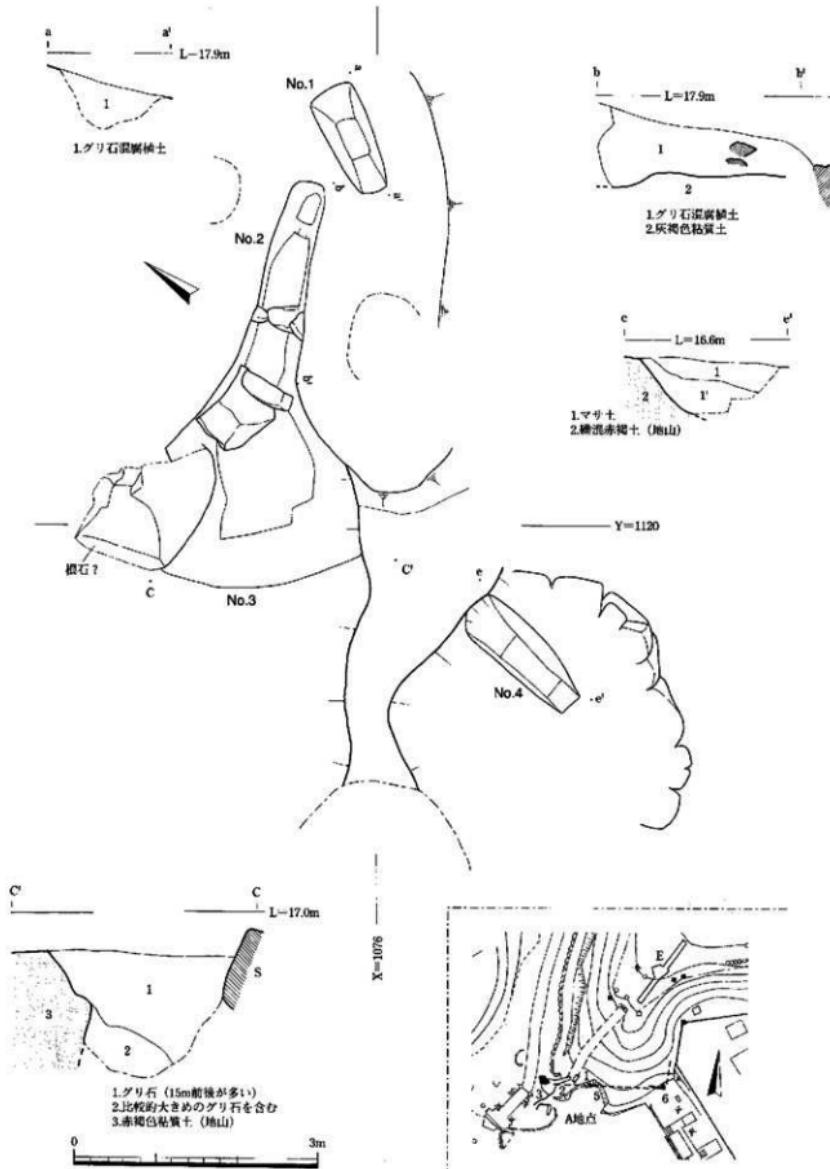


Fig.7 A地点No. 1 ~ 4 トレーナ (1/60)

No.3トレントレーナーはこの緩斜面の張り出しと本丸西辺の墨線が合致するコーナーに位置する。本丸西辺の裾尾は昭和12年前後に、豊川稲荷神社が創建され、参道が敷かれた折に削り切られ、新たな石垣が築かれた。現在、この参道に沿って点々と大石が露頭している。これらは落とされた石垣の根石や築石と考えられ、No.3トレントレーナーの石材の形状は三角錐に近く隅角の可能性がある。

このトレントレーナー内には上記の石垣築石のほか瓦片を多く含むグリ石と切土のラインが検出された。トレントレーナー周辺に盛土はほとんど無く、切土のラインは地表面直下近くで検出できた。この切土のラインは本丸より西側の丘陵の向きと同じく南西方向に延びていく。従って、本丸の西側にさらに石垣が築かれている可能性はあるが現況ではみられない。絵図には本丸の西側に「腰曲輪」、さらに西側の介財大社を降った北側にも「曲輪」が記載されている。昭和初期の地形図でも本丸の西方に緩斜面がみられ、曲輪が想定される。

No.3トレントレーナーの南側のマサ上で整地された部分にNo.4トレントレーナーを設定した。このトレントレーナーの北端から地山が切り込まれ、神木があるため60cm掘り下げたにすぎないが埋土は現代整地のマサ上ののみで、切土のラインも大きく渦曲することから新しい掘削と思われる。

コーナー付近とみられるNo.3トレントレーナーの東側延長で石垣根石3個の列が露出していた。(No.5トレントレーナー) 前面が削られ、根切りの溝等は検出されず、周辺には背部のグリ石がなだれ落ちていた。根石の下底のレベルは標高16.5mを測る。

さらに東側の祠近くの裾部でも3個の根石が露出していた。(No.6トレントレーナー) 露出していた石材の1つは他と比べ大きく三角錐状を呈し、地形からみて北側へ折れるコーナーに当たる。東側へ延長していく石材は抜かれているが、形状と位置から角石もしくはそれに隣接した根石と考えられる。根石の下底のレベルは16.7mを測り、No.5トレントレーナーで検出された根石下底のレベルとほぼ同じである。

No.3、5、6トレントレーナーで検出した根石は延長20mに及び概ね直線状に配されている。下底のレベルではNo.3トレントレーナーの根石が1m程下がり落とされているものと思われる。この墨線の形状は絵図にはなく、既述の通り階段状の通路が描かれている。

出土遺物

No.3トレントレーナーから瓦当を含む多量の瓦片が出土した。1は鳥伏間である。瓦当径10.6cmを測る。巴頭は円形で断面は台形に近い。巴首は鋭くくびれている。円形珠文の間隔はばらつきがあり接してものもある。断面は薄鉢状である。2は黒田家家紋の3つ葉の楕を中心とした藤巴紋の軒丸瓦である。瓦当径9.4cmを測る。花弁が次第に小さくなりながら長く連続している。3も藤巴の軒丸瓦である。4は瓦当径6.7cmを測る棟込瓦と思われる。瓦当の藤巴は浅く刻まれている。5は平瓦を斜めに切った隅瓦である。中心筋に花弁の下半を配している。周縁に「新左衛門」の木印がみられる。6は6珠文からなる梅花と唐草文が印刻されている。

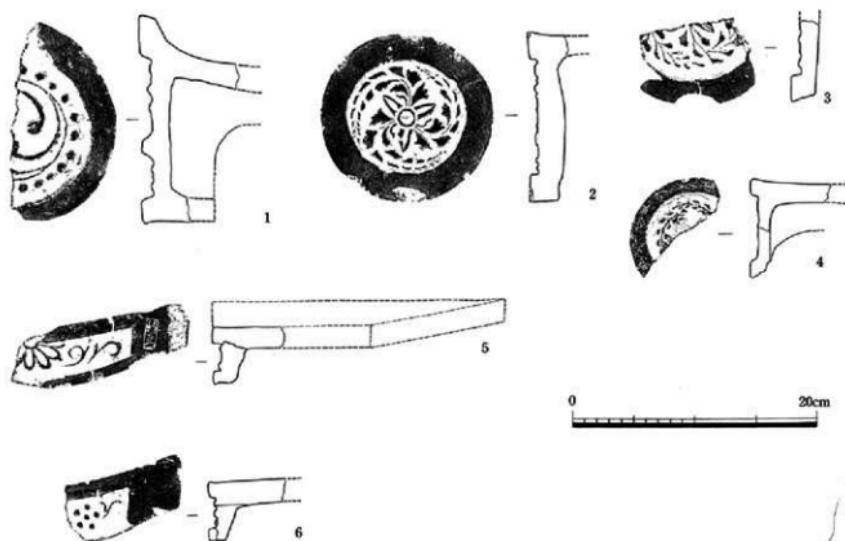


Fig.8 A地点No.3トレンチ出土瓦実測図 (1/4)



Ph.8 A地点No.3トレンチ出土遺物



Ph.9 A地点No.5トレンチ石垣（西から）



Ph.10 A地点No.6トレンチ石垣（南西から）



Ph.11 A地点No.6トレンチ石垣（西から）

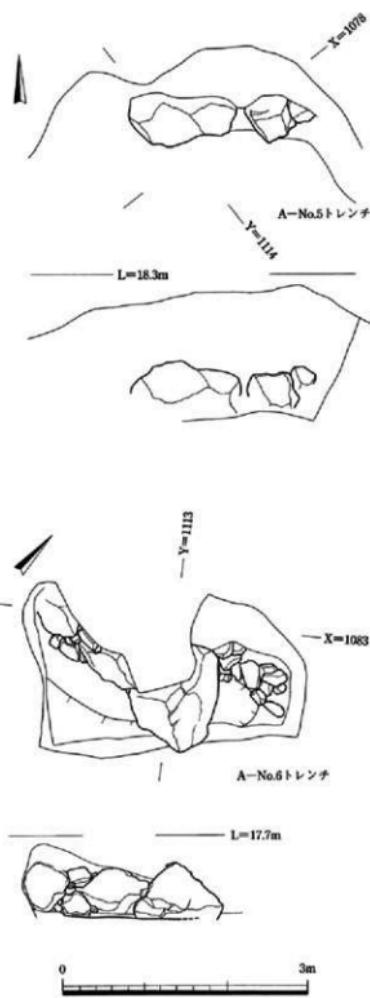


Fig.9 A地点No.5、6トレンチ検出石垣実測図（1/60）

(2) B地点の調査

本丸北側の宅地造成によって約2.5mの深い削平を受けた範囲である。トレントを入れ切土のラインと石垣の検出を計画したが、北側の住宅との間が崖状になって隣接するために、安全上、崩れたグリ石の除去はほとんど行わず石垣の検出は断念した。

No.1～3トレントでは北東方向へ張り出した直線的な切土の平面ラインが検出された。北東隅へ張り出した墨線は筑前国統風土記附録の絵図には無いが、宮崎家藏の絵図の表現と近似する。

No.3トレントの土層断面では厚さ約30cmのクラッシャーの直下でやや酸化した褐色粘土が検出され、その20cm下では灰白色に変化していることから、地山が深く切り下げられていることが推測される。切土の傾斜は水平約3mにわたっては極めて緩やかな角度で傾斜し、その範囲には大振りの約20cm大のグリ石が詰められている。さらに北側からは急勾配で切り込まれ、グリ石も10cm大の小振りものが多くなる。

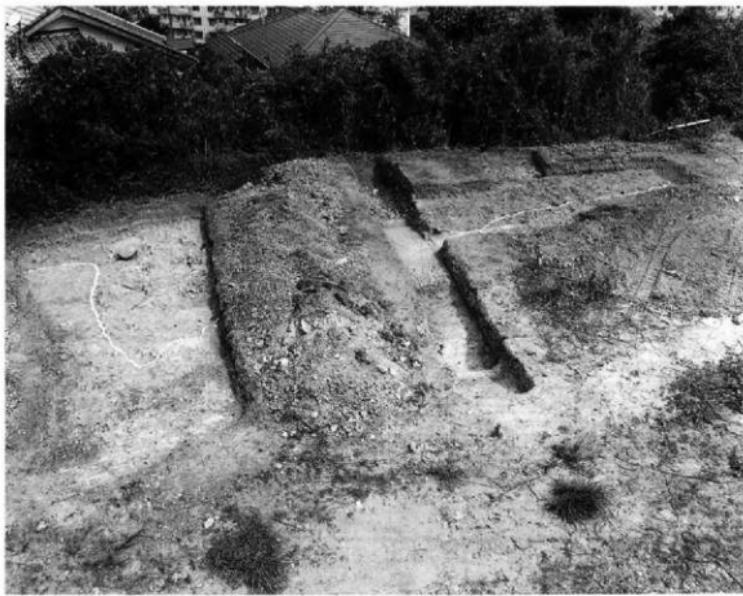
No.3トレントで北側に折れ出隅が造られている。切土の北側への張り出しは南北4.5m、東西10.5mの規模である。このトレントでは切土ライン近くのグリ石に混ざって若干の50cm大の築石が出土した。

No.3トレントで検出された出隅の延長は本丸北西際のNo.4トレントで検出され、このトレント内で南側に折れ、さらに西側へ張り出す複合した出隅を構成している。この2つの出隅間の入隅部分でグリ石を振りさげ石垣2～3段分を検出した。

石垣は切土のラインから約2m離れた位置で検出された。入隅の石垣墨線は約119°の角度で折れ曲



Ph.12 B地点全景（南上空から）



Ph.13 B地点No.2、3トレーナ (南から)



Ph.14 B地点No.4トレーナ (南から)

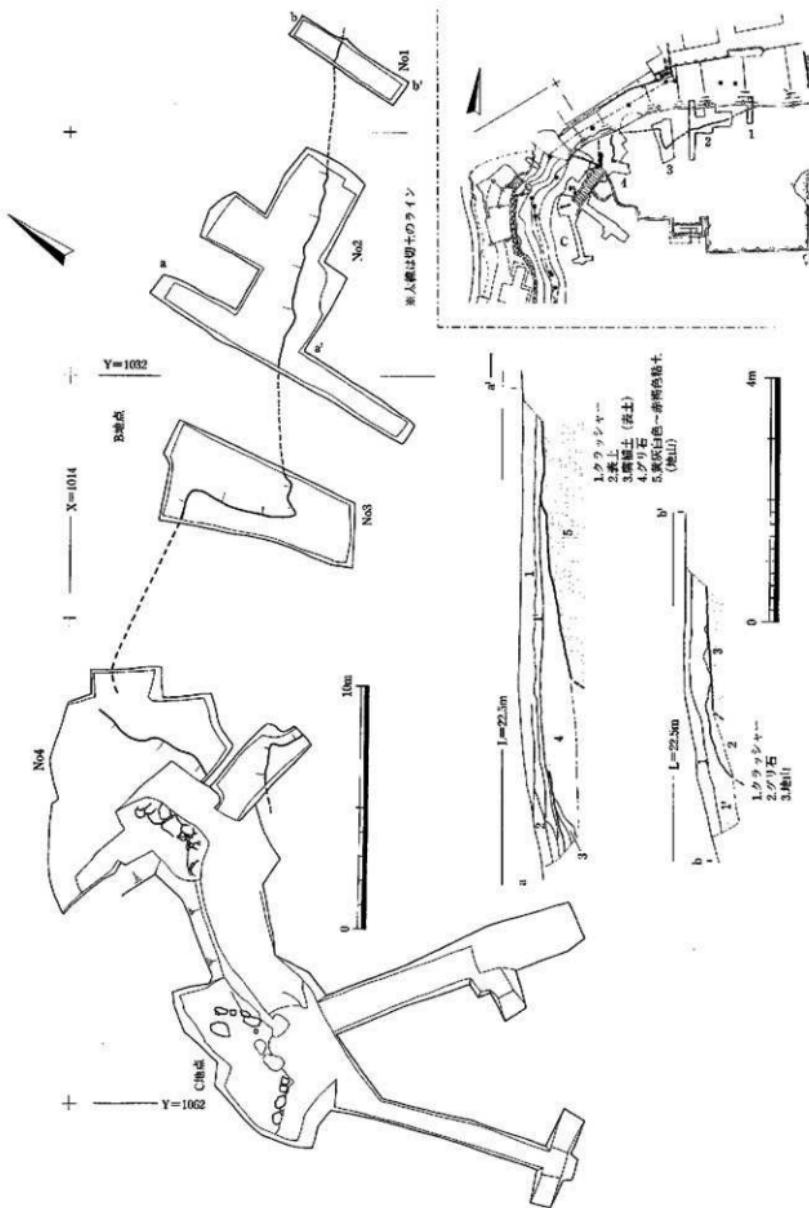


Fig.10 B、C地点トレーンチ配置図 (1/200, 1/80)



Ph.15 B地点No.2トレンチ土層（南西から）

がり、現代の造成土下に延びていく。検出された石垣築石の勾配は約55°と緩やかで、削石と思われる石材が一部みられる他は加工をほとんど施さない自然石を用いたいわゆる野面積みである。隅の部分は間詰め石を多用し調整している。築石の大きさは50~60cm大が主体を占め、2石ほど1m近くの巨石が含まれる。石材は鑑定していないが、築石の8割方は周辺で調達できる礫岩が占め、残りを砂岩や花崗岩等で構成している。他に玄武、安山、花崗岩が間詰め等に少し含まれる程度である。なお、第1次調査で検出された石垣根石は蛇紋岩と花崗岩で大半を占めている。

北側に延長していく石垣の前面にはグリ石が崩れ落ちていたが、西側へ延びる石垣前面はグリ石が少なく粘土が多くみられた。調査範囲が極めて狭いために上部の盛土が崩れたものか、意図的に埋めたものか判断できない。

No.4トレンチで切土の上端から約2m離れた位置で石垣が検出されたことから切土のラインに沿って石垣の墨線を推定していくと東側のNo.2トレンチでは既述の通り下方の石垣は切土の上端より3.5m以上は北側に築かれていると考えられるためNo.3トレンチで検出された南側への屈曲に合った石垣の推定ラインができる事になる。上記の通り安全上、現況では石垣の検出をすることが不可能なために推測にすぎないが、第1次調査で検出されたように前面にさらに石垣を築いたことや段状に石垣を構築すること等が可能性としてあげられる。



Ph.16 C地点全景（東上空から）

(3) C地点の調査

本丸北西隅に位置する。B地点のNo.4地点トレンチから現況の階段で南側に比高差約2mを上った地点である。この地点は平成17年度（3次）と平成18年度（4次）の2次にわたって調査を実施した。詳細は18年度の4次調査の整理が終えた時点での報告なので、ここでは概略を記す。

B地点No.4トレンチで検出された石垣にみられるように西側へ張り出していく出隅の部分である。しかし、絵図には描かれてはいない。昭和初期の地図では現在豊川稲荷神社が建てられている付近の本丸西辺中央に小さい屈曲がみられ、北西端が西側へ張り出しているのが看取できる。特に本丸より下方のコンターは顕著に張り出している。なお、B地点No.4の北側への出隅部分も地形図では本丸下の曲輪状のテラスよりも下方で谷筋を挟み北西へ張り出しているのが判る。

（遺構面と土層図）

C地点では名島城跡で初めて建物跡が検出され注目された。位置や規模から隅櫓の基礎部分と考えられる。第3次調査の前にC地点に上る階段とその側壁が除去されたことによって昭和32年の宅地造成以前の旧表土が検出され、遺構面を確認することができた。

Fig.11はその階段北側の側壁部分にみられる土層図である。第4層の宅地造成以前までの旧表土がC地点で検出された列石の直上からB地点No.4トレンチの石垣に向かって階段状に傾斜している。従って、本丸北側は昭和32年の宅地造成によって切り下げられているが、すくなくとも北西端は造成以前より傾斜し、北側が低かった事が判る。また、隅櫓の基礎とみられる列石直上にこの表土層が被ることから、現代まで堆積土がなく遺構、遺物が露出していたことになる。事実戦前、戦時中にはこの



Ph.17 B地点No.4 トレンチ石垣からC地点土層（東から）



Ph.18 B地点No.4 トレンチ石垣（北から）

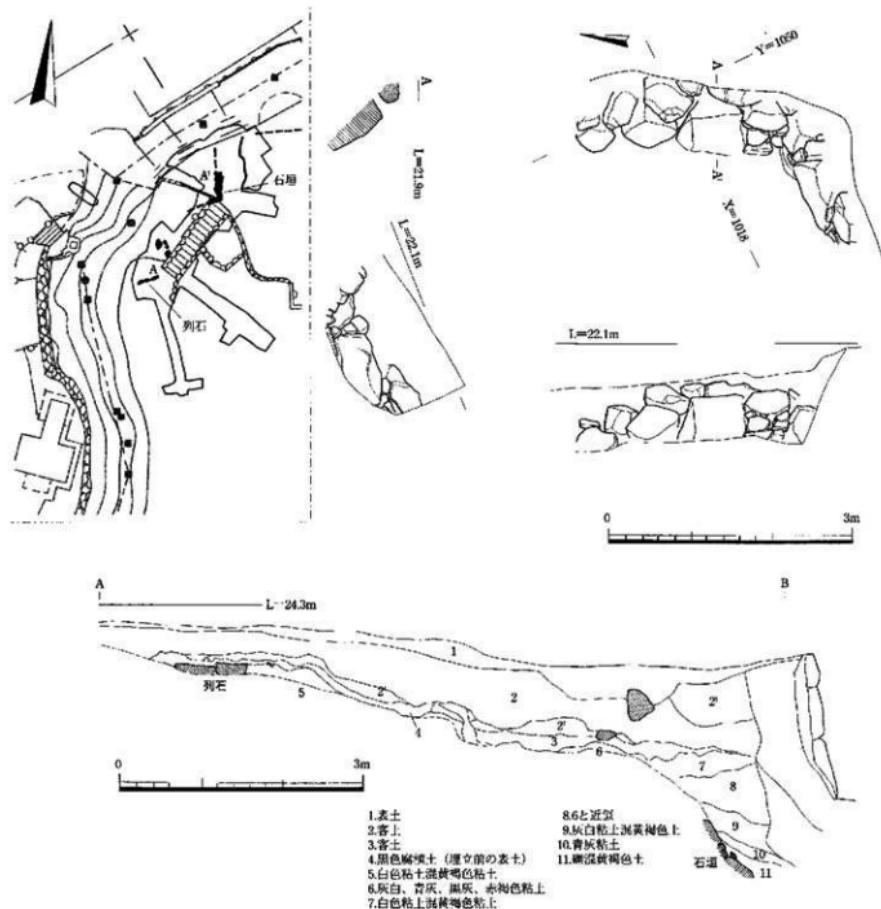


Fig.11 B地(No.4トレンチ検出石垣と土塙岡 (1/60)

付近で瓦をよく拾うことができ、「城の中心」と言っていたといふ話からも頷ける。

また、1次調査の報告時に詳しく記すがC地点の隅櫓は基盤上ではなく、張り出した造成土の上に構築されている。

(隅櫓)

第3次調査の終了間にC地点で方形に区画した列石を検出した。時間的に余裕が無かった為に列石と甃石を露呈するに止まり、今年度の4次調査で改めて精査した。1次調査分が未整理なために、ここでは3次調査で判明したことを記す。



Ph.19 C地点検出周辺基礎（南から）



Ph.20 方形区画内の敷石と礎石（西から）

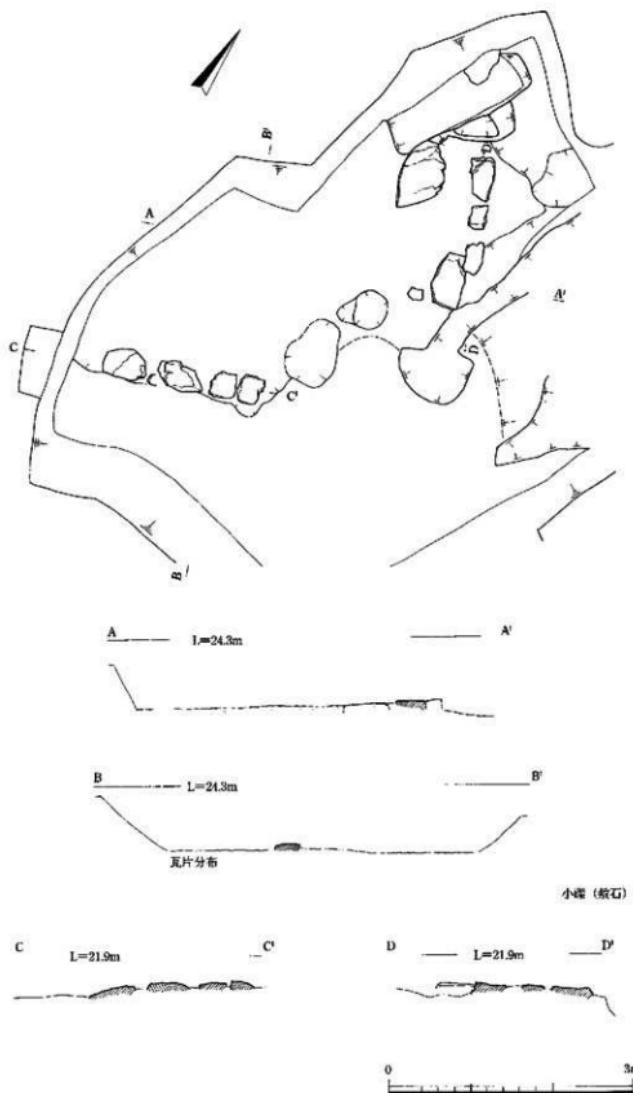


Fig.12 C地点検出構造遺構図 (1/60)

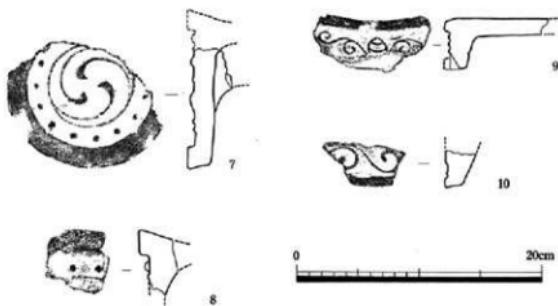


Fig.13 C地点出土瓦実測図 (1/4)



Ph.21 C地点出土遺物

厚さ40~60cm堆積した現代の宅地造成による客土を除去し、黒色腐植土の旧表土を全面に検出し、数cmこれを除去しながら下げていくと30cm大の平石を並べ方形に区画した列石を検出した。方形区画内には径10cm以下の小円礫や角礫が敷き詰められていた。また、方形区画外の南側には多量の瓦片が分布しているのが検出された。

方形区画の南東隅は住宅の階段造成の折に破壊されている。北側と西側は神社敷地との境界で調査区外となるが、境界付近で急落している。特に調査区北端は崖落ちしているのが確認された。このため方形区画全体の規模は判らないが、列石を延長し検出された規模は南辺4.9m以上、東辺4.2m以上を測る。

列石は南東隅付近が抜き取られているが、南辺に4個、東辺に4個が検出された。何れも上面が平坦な石材を用い、その上面のレベルは内部の小礫より数センチ高い位である。石材は鑑定していないので正確ではないが、花崗岩4、変成岩(砾岩か)2、玄武岩1、堆積岩(砂岩か)1と思われる。東辺の3個は直線的に配列されているが、長辺が65cmと長い石材(花崗岩)1個が内側に置かれ、入口施設の可能性がある。区画内部からは80×55cmの花崗岩からなる礎石1個が検出された。下部(根入りの深さ)に50cm以上入る。南辺の推定される石材から芯で300cm、東辺の石材から75mを測る位置に配されている。礎石上面のレベルは列石とほぼ変わらない。

以上の施設はその位置からも隅櫓の基礎部分と考えられる。方形区画内部からは木痕による落ち込みは検出されるが遺存した礎石に見合うような規模の礎石が抜き取られた痕跡は見出せなかった。従って建築学的な知見からも考察する必要があるが、外側に配列された列石上には壁とそれを構築する柱材が置かれ、礎石は構内部の柱材が載っていた可能性を考えている。また、南辺の列石を境にして外側のみに多量の瓦片が分布していたことからも列石上に障壁となる構造があったものと推察される。

区画内部は土間もしくは床張りと考えられるが、検出された小礫上には黒色の縮まりがない旧表土のみが堆積していた。また、既述の通り、小礫上面と礎石上面のレベルは数センチの差しかなく、厚い土間の土は考え難い。

列石東辺の北端はB地点No.3 トレンチで検出された石垣からの延長からも推定できる。しかし、1.8m下の石垣延長は列石東辺の現況での北側落ち際にくることになり、B地点とC地点との比高差とその分の石垣の傾斜を考え合わせると右垣天端の推定ラインは検出した方形区画の内側にくることになる。従って、B地点で検出された石垣は屈曲しているか若しくは外側に拡張した石垣が1次調査同様に存在している可能性を考える必要がある。しかし、現状では安全面から調査が限られるために石垣ラインについて確定することが困難な状況である。この事については改めて4次調査の成果をふまえ次回に再度報告することにしたい。

出土遺物

7、9は方形区画内の敷石中から8、10は区画外からの出土である。7は三巴文の軒丸瓦である。文様区径10.1cmを測る。巴頭は鉤状で、尾は長く連続して圓錐を造る。周縁の背後に丸瓦が接合した面がみられる。8も三巴文の軒丸瓦片である。9は宝珠文から上下に反転葉が展開していく。文様区の縦幅2.3cmを測る。名護屋城分類のⅢ-3Dに近い。10は4次調査出土の瓦から三葉文の中心飾りと思われる。2回転の反転葉とみられ、周縁脇区から欠損している。1回転目の上部に接して2回転日の支葉が展開していく。

(5) D地点の調査

C地点の北西側に下がった地点のトレンチ調査である。崩れ落ちたグリ石の下層に地山とみられる

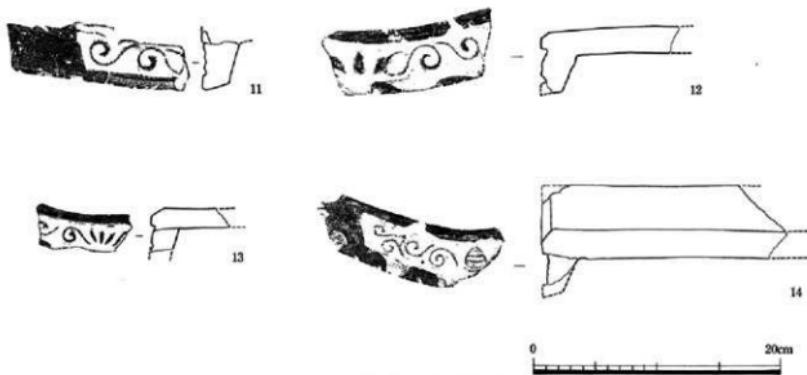
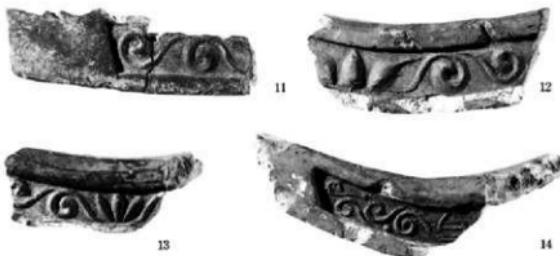


Fig.14 D地点出土瓦実測図 (1/4)



Ph.22 D地点出土遺物

淡赤褐色～灰白色粘土が傾斜しているのを検出した。この地山のレベルはA地点において検出された石垣根石の基底レベルとほぼ同じ標高16.6mを示す。石垣は検出されなかったが、瓦片が多く出土し、4点の瓦当も含む。

出土遺物

11と12は同タイプとみられる。11の素文脇区幅は6.0cmと広い。12の中心飾りの三葉文は肉厚で、その脇葉の基部に接して唐草文が反転する。2回転目は1回転目の上部接する。内区の縦幅2.8cm、瓦当上面端が面取りされている。13の内区縦幅は1.5cmで文様も小振りで比較的細い。三葉文の脇葉は直線的に延びる。唐草文は11、12に比べ細いが形状は近似する。瓦当上面端が幅広く面取りされている。14は2本線を入れた宝珠の中心飾りから4回転した均整唐草文が延びる。各唐草文は接せず、1回転目と2回転目の間と4回転目の伸びた先に接して小さめの珠文が付く。瓦当の縦幅も2.3～2.7cmにやや広がっていく。脇区幅は4.5cmを測る。外区下端の高さで刻みを入れた平瓦との接合面がみられる。11～13も同様の接合である。

(6) E地点の調査

曲輪の南西部に位置する。2次、3次調査でトレンチをあけ、集石が検出された為に4次調査で広



Ph.23 E地点検出集積（南から）

く調査区を設定し、再度調査を行った。C地点同様に今年度実施した4次調査の成果は未整理であるために今回は3次調査までの成果の概略を記す。

この地点は南西の名島神社側へ張り出した出角の形状がみられ、絵図からも神社（絵図の弁財天社、宮）と連絡していたことが判る。現状では張り出しの途中まで緩斜面が延び、ここにトレンチを設定した。木痕が大きく、なるべく木を傷めないように掘削を進めたためにトレンチ幅が限られた。

集石が客土下に堆積している黒色腐植土からなる表土の下層から検出された。北側に締まりのない黒色土と混じりあって拳大の礫が検出され、整然と敷き込まれず動いている状況がみられた。また、南側の一段凹んだ範囲に明黄褐色粘土に包まれて人頭大以上の礫が重なり合って出土し、崩落とされたような状況がみられた。集積については4次調査報告でプランを検出したので次報告で再度詳細を述べることにする。遺物は瓦片が少量出土したのみである。

(5) F地点の調査

曲輪の北東隅に位置する。石垣で仕切られ、切り下げられた西側より70cm高くなっている。隅櫓

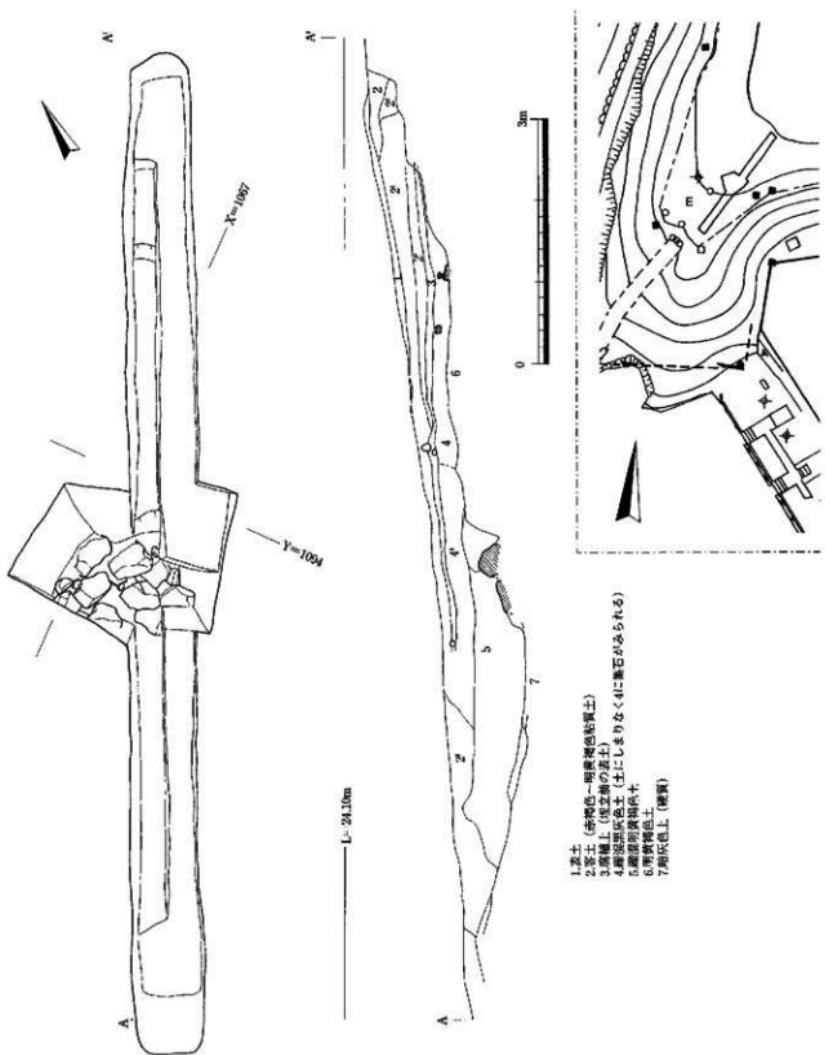


Fig.15 E地点トレンチ実測図 (1/60)



Ph.24 F地点全景（西上空から）



Ph.25 F地点トレンチ北壁土層（南西から）

の検出に努めたが、瓦片や石垣等は検出されなかった。客土下に溝状のものが落ち際を巡るが、グリ石等は出土せず、新しい埋土で埋まっていることから石垣築造の根切りにすることはできない。しかし、この溝が現況の進入路に沿って東側に高く残っている墨壁状のラインに繋がり、Fトレンチ内で西側に湾曲していく部分は槽の痕跡を留めている可能性もある。

瓦等の遺物はほとんど皆無に近い。

(6) 中央部の調査

2次調査では展望台建設予定地の曲輪北

西部を中心に調査区を広げた。この時点では表土直下の宅地造成による客土層を築城時の盛土と誤認していた。遺構検出面が客土を除去した現地表より60~110cm下に堆積する旧表土より更に下層にあることが判明したのは3次調査においてB地点No.4トレンチの石垣の土層観察ができたことによる。この観察をもとに遺構検出面を設定し3次調査のC地点では隅櫓遺構を検出し、4次調査では中央部にトレンチを入れ発掘を行った。従って、曲輪中央部の調査報告は成果が見られつつある4次調査以

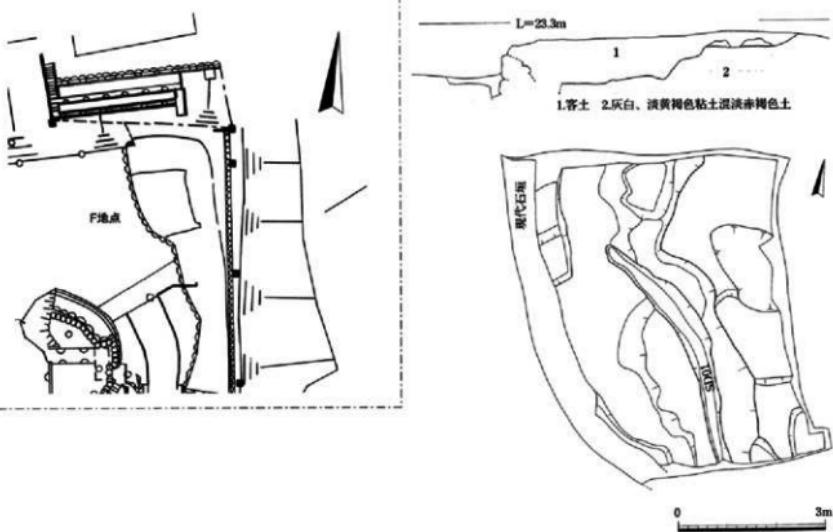
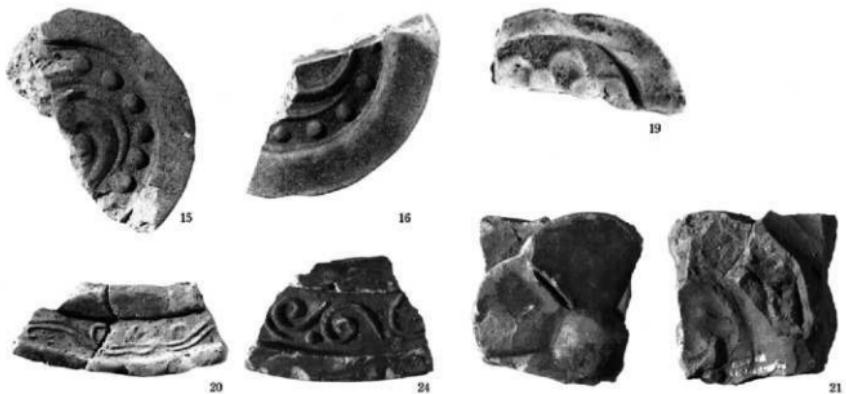


Fig.16 F地点トレンチ実測図 (1/100)



Ph.26 F地点全景 (西から)



Ph.27 本丸中央部出土瓦

降の報告で行うことにしておいた。

出土遺物

15~18は2次調査で曲輪中央部の客土層から出土した瓦である。15の巴頭は鉤状で断面台形を呈す。珠文の間隔は不均等である。16の周縁は比較的高く1.0cmを測る。珠文は均等に配列されている。17の珠文の間隔は狭く、断面は低い蒲鉾状である。18の珠文は小さい梢円形を呈し、断面は低い蒲鉾状である。19は2重になった菊花文軒丸瓦である。20は名護屋城分類のⅢ-5C-aに比定できる。中心飾りの宝珠文平行する2条の支葉が伸長し、鉤状の反転葉が上下に付く。平瓦部から周縁外区まで延びた瓦当との接合面がみられる。

21は3次調査で曲輪北西部の客土中から出土した飾り瓦である。中央に径3.8cmの円形で断面半球形の花房を置き、そこから放射状に花弁のくびれに向けて線刻し5花弁を表す。形状から梅花と思われる。花弁に反りはみられず平坦である。裏面には湾曲した丸瓦部との接合面がみられる。22、23は3次調査で曲輪中央部の客土中から出土した。22は珠文と巴尾がみられる。23は菊紋の軒丸瓦である。24は表採された軒平瓦である。宝珠の下に棘の付いた短い支葉があり、その端から反転葉が展開していく。1回転目と2回転目の間に小さい珠文を配している。このタイプは1次調査でも出土している。

M1は3次調査で中央部の客土から出土した。鉄製で石割のための矢穴を彫るサキノミである。全長25.4cmを測る。頭部はつぶれたように幅広くなり、体部は幅1.9cmの8面体である。矢先は4面取りである。客土中からの出土であるため時期は不明。

(7) G地点の調査

曲輪の東辺のやや南寄りに位置する。ここでは大手側壁の石垣が検出された。絵図においてもこの

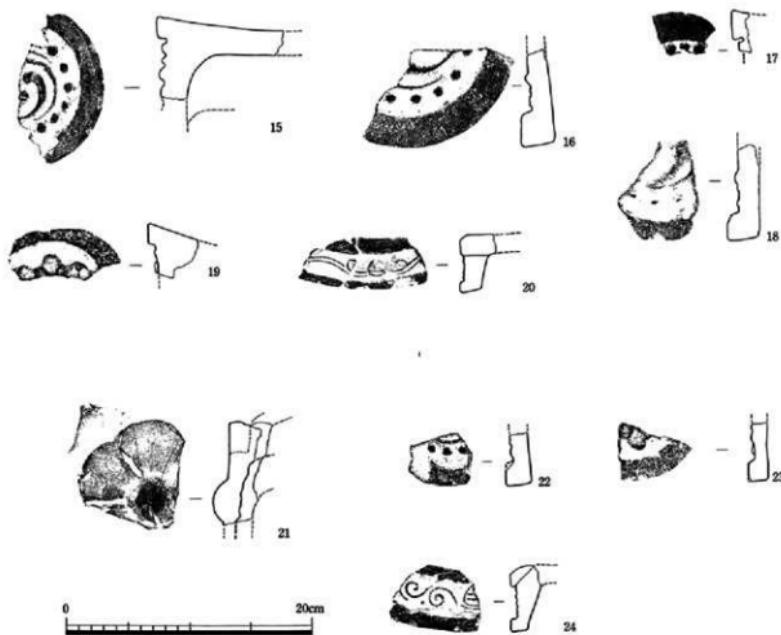


Fig.17 中央部出土瓦実測図 (1/4)

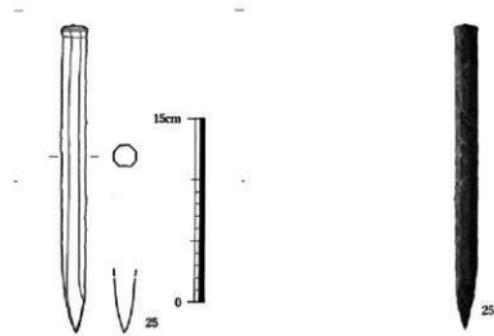


Fig.18 中央部出土サキノミ実測図 (1/4)

Ph.28 本丸中央部出土サキノミ



Ph.29 G地点と東辺塁壁（北西上空から）

位置に階段状の入口が平入りで描かれている。特に小早川期の絵図といわれる「続風土記附録」の名嶋古城図の大手は東辺の南寄りに描かれ実際に近い。この大手の痕跡はFig.3の昭和初期の地図でも回んだ状態を残していたことが判る。

検出された大手石垣は現況の進入路の東側に沿って続く土塁状の高まり（塁壁）を東西に断ち切るように石垣が検出された。この塁壁の東側側壁にはグリ石がみられ、石垣が築かれていたことが判る。この北側への延長は第1次調査で検出された石垣へ続くと考えられる。また、この塁壁の天場（幅）には瓦当を含む瓦片が散布している。

3次調査では上記のように絵図や地形図から見当を付け塁壁にトレンチを入れるとすぐに埋もれた石垣築石に当たった。この石垣を露呈していくように重機と人力を併用し堆積した瓦片を多く含むグリ石を除去する作業を進めた。掘削は淡赤褐色粘質土の整地面に変わったレベルで止め清掃を行った。

大手石垣の西側は進入路、東側は宅地によって壊され、遺存する部分は延長5m程とみられる。相対する南側の側壁石垣は破壊され、現況では不明である。

今回、境界から引けをとって検出した北側側壁の石垣は延長2.3mである。遺存する石垣上面から整地面までの高さは1.5mを測る。根石は検出していないが、整地面の高さが標高17.9mを測り、A地点や北側の第1次調査で検出された根石下底のレベルと1.5~2m比高差があるため1、2石ほど下と考えられる。自然石ないし割石の6個の築石中4個は花崗岩が占め、B地点で検出された石垣に比べ花崗岩が意識して多用されている。勾配は57°を測り、B地点で検出された石垣と近似し緩やかである。間詰めには脆弱な疊岩等の変成岩が用いられているが、抜け落ちた石材は少なく、一度に埋まっ



Ph.30 G地点大手石垣（南から）



Ph.31 G地点大手石垣（西から）

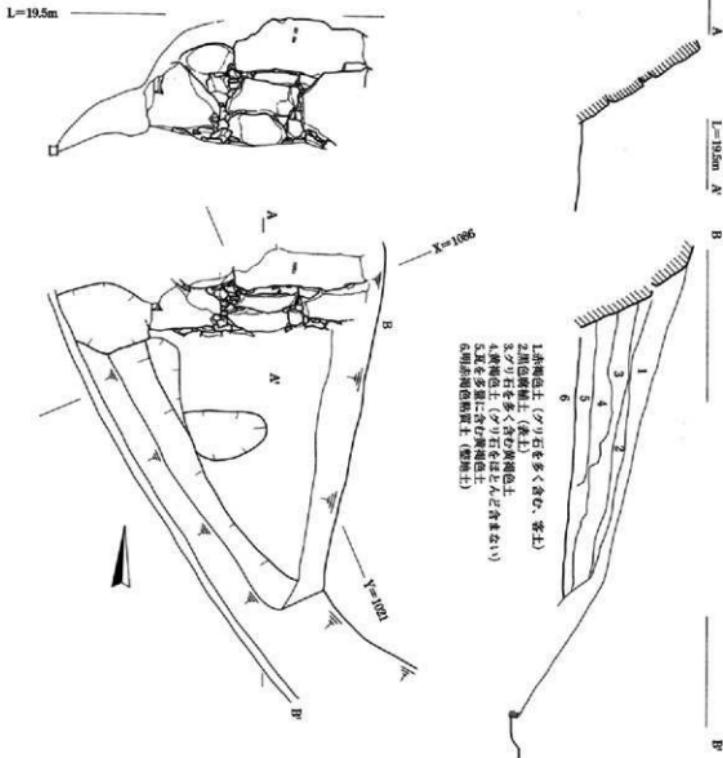
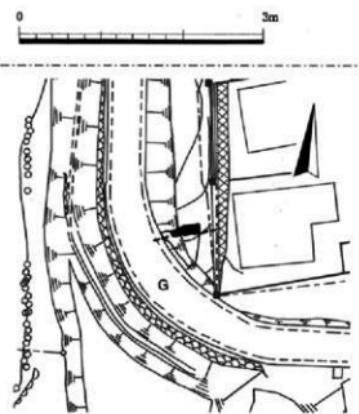
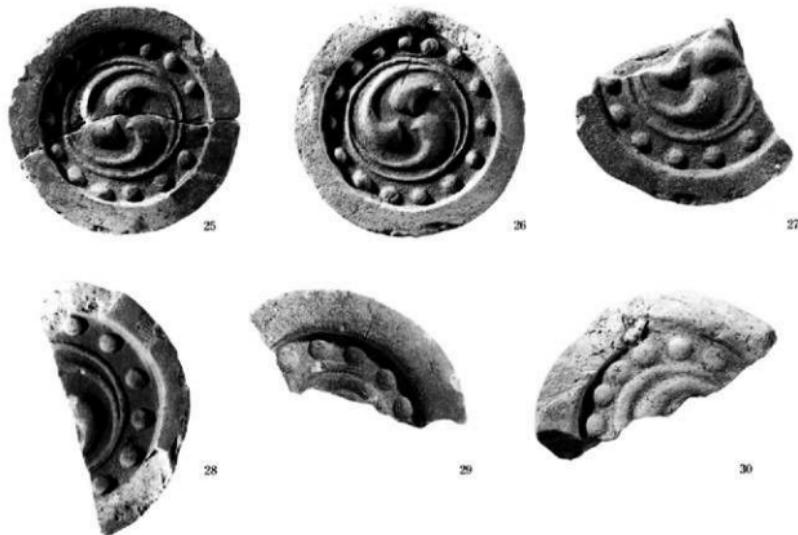


Fig.19 G地点検出大手石垣 (1/60)



Ph.32 G地点大手石垣 (南西から)





Ph.33 G地点出土軒丸瓦当

たものとみられる。

石垣前面の土層は現地表面から10~30cm下まではグリ石混じりの赤褐色土が堆積し、その下層に表土層の黒色腐植土が堆積していることから、宅地造成以前にはこの黒色腐植土まで埋まった状態でFig.3の地形図のように遺存していたものと思われる。さらに下層は概ね3層に分けられる。最下には瓦当を含む瓦片を多量に含む層が石垣から約1.8m前面まで堆積している。門や塀に用いられた瓦であろう。その上層に遺物やグリ石をほとんど含まない黄褐色土が厚み約20cmで堆積している。この層が何に起因するものか判然としないが、漆喰は見あたらないが、土塀や基壇等に用いられた可能性も考えられる。さらにその上に石垣が壊され崩れ落ちたグリ石の層が厚さ約20cmで続く。これらの層は上記の間詰め石の状況などからも時間をおかず一気に埋まったと考えられ、破城による破壊に伴ったものと思われる。

検出した最上部の築石に矢穴が2箇所穿たれている。矢穴の上辺は2箇所とも 5×8 cm、下辺の長辺はともに4cm、短辺は1cmと2cmを測る。深さは前者が4.8cm、後者が6cmを測る。矢穴の間隔は5cmである。石割は中断されているが、石材が横長すぎることを意識したことは容易に考えられる。しかし石垣築造時のものか、後の石取りによるものかは判断がつかない。

既述の通りこの大手から絵図やFig.3の地形図では平入りになっているが、現況では進入路西側に築かれた石垣や法面が急峻にそびえ、直線的な動線には勾配に無理がある。しかし、客土や造成により大きな改変を受けているため、現況は実際の勾配とは大きく異なっている可能性が高く判断できない。また、現況の進入路と近似した動線をとり折形になっていた見方もできる。何れにせよ確定でき

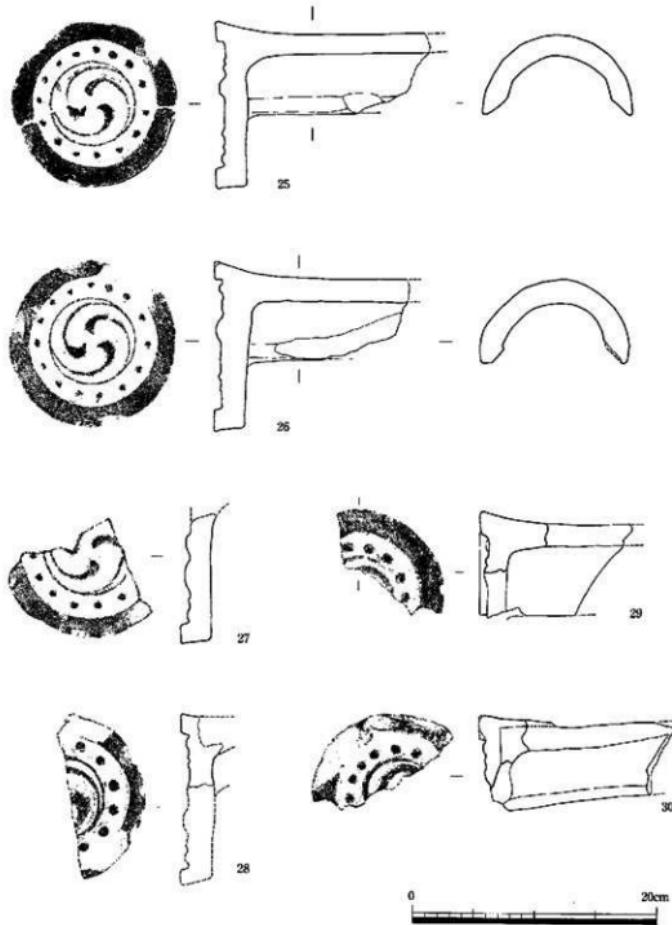


Fig.20 G地点出土瓦実測図1 (1/4)

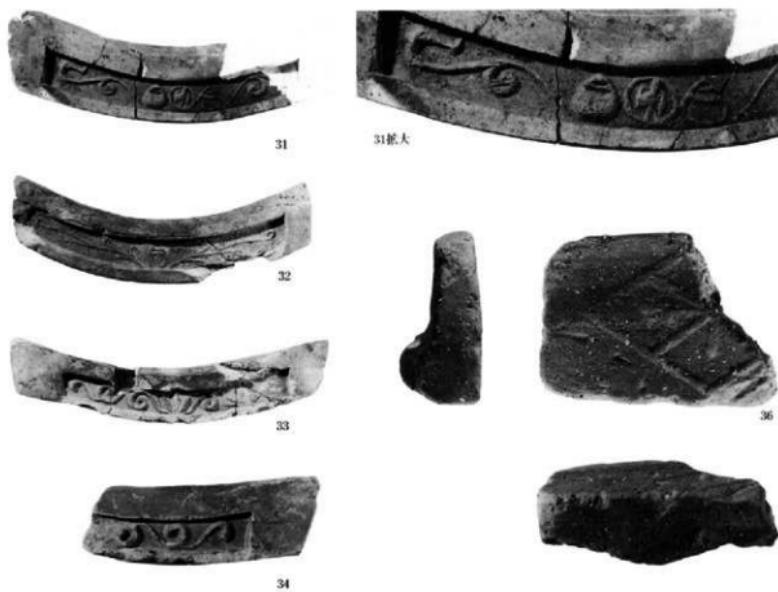
す今後の大きな調査課題としたい。

出土遺物

軒丸瓦

(三巴文) 28が上層の黒色腐植土中から出土したほかは図示した絶て下層の黄褐色土中から出土した。

25、26は巴頭は鉤状で断面は丸みはあるが、台形に近い。尾は長く連続して圓線をつくる。珠文は均等な間隔で15配列している。その断面は半球形。周縁を含まない瓦当径(文様区) 10.2cm、素文の



Ph.34 G地点出土軒平瓦当

周縁幅1.5cm、高さ6mm。名護屋城の分類では。R15aに近い。25の丸瓦凸面の瓦当との接合部には幅3mmのノミ状工具で突くように調整した痕跡が連続している。25、26の凹面には布目、模骨痕、紐の痕跡を残し、26にはコビキB類の平行線がわずかにみられる。27、28も同タイプとみられ、28は周縁の背後に丸瓦との接合痕がみられる。29は巴尾が比較的幅広く、それぞれ離れている。珠文は径1.1cmと大きく、断面は蒲鉾形に近く、低い。凹面は布目がナデ消されている。30の巴尾は太く漸次細くなっていくため、それぞれ近接している。珠文は径1.2cmと大きく、断面は低い球形を呈す。間隔は狭く不均等。周縁を含めた瓦当と丸瓦との間に刻みを入れた接合部がみられる。凹面には太い絆糸を巻いたような痕跡が残る。

軒平瓦

31が上層の黒色土から下層の黄褐色土にかけて出土した他は下層の黄褐色土からの出土である。

(宝珠文) 31は中心飾りを3個で構成し、中心から左右では凹凸を逆に意図した特異な文様である。中央には圓線の中にやや斜めの縦線を3本配し、圓線に接した中央の長い線と右側の短い線の間には細い横線が斜めに入り凹に似た形である。左側は横線の上下は埋まつたような凸面になっている。この意図は左右に配された宝珠文にもみられ、右側の2本の横線が凸で、左側が凹で表現されている。均正唐草文も同様に1回転目の巻いた部分が左側では埋められ、そこに棘状の横線が凹面で造られている。遺存する左側の2回転目は先端が巻かずに鉤状になっている。周縁の上部は中央にむかって縦幅、ヘラによる面取りが幅広くなる。瓦当幅(文様区)は復元で17.0cm、縦幅2.0cmを測る。平瓦部分の幅は瓦当からあまり変わらず20.7cm、全長は26.0cmを測る。32は名護屋城の分類III-5Dに比定

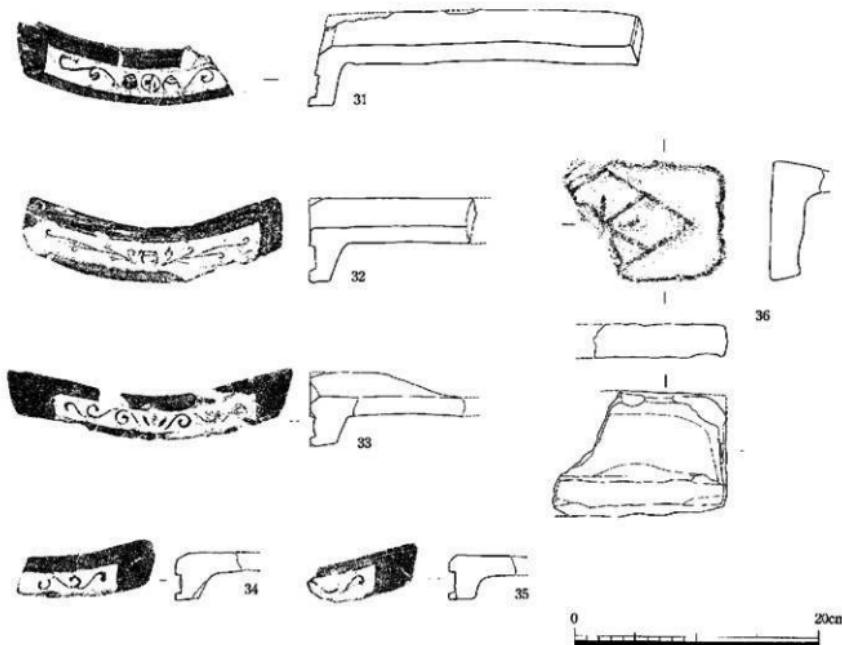


Fig.21 G地点出土瓦実測図2 (1/4)

できる。文様区の幅17.9cm、縦幅2.0cmと大きさもほぼ同じである。中心飾りの宝珠は紡錘形をなしているが、下端は周縁で切られている。唐草文は反転葉のない下向きに伸長した支葉からはじまり、左右それぞれに直線的に伸長した先に上向きの反転葉が3、下向きの反転葉が1付く。周縁外区の上端は変わらず上端の面取りは小さい。

(三葉文) 33は名護屋城分類の。-5Cタイプである。文様区幅15.9cm、縦幅1.7cmを測り、比較的小さい。中心飾りの脇葉は直線的で反りがない。その基部から上下交互に巻いた反転葉が接して連続する。周縁外区の上部は中央に向かって幅広く面取りされ、脇区の側縁は急角な斜めに切り取られている。34、35も同タイプであるが、35は周縁上部の下端から平瓦部分に統く接合面がみられる。

袖瓦

36は上層の黒色上中から出上した四つ割菱の中央に十字の花弁状の線を付した文様の袖瓦である。袖垂れの復元幅19.4cm、縦は右側縁が9.0cmを測り、左下がりになっていく。周縁は無く文様は平坦面に菱文と中央の十字が高さ1~2mm、断面薄鉢状で浮き出ている。外面は灰色であるが、器胎は黄褐色~淡赤褐色を呈し、焼成は軟質で極めて脆弱である。器面や胎土中に白色砂粒が多くみられる。博多遺跡群や前原市の高祖城で唐花菱文の袖瓦が出土し大内氏との関係が示唆されているが、一方では秋月氏の古処山城や名鳥城と関係が深く大内氏と敵対しその影響を考えにくい大友氏方の立花城か

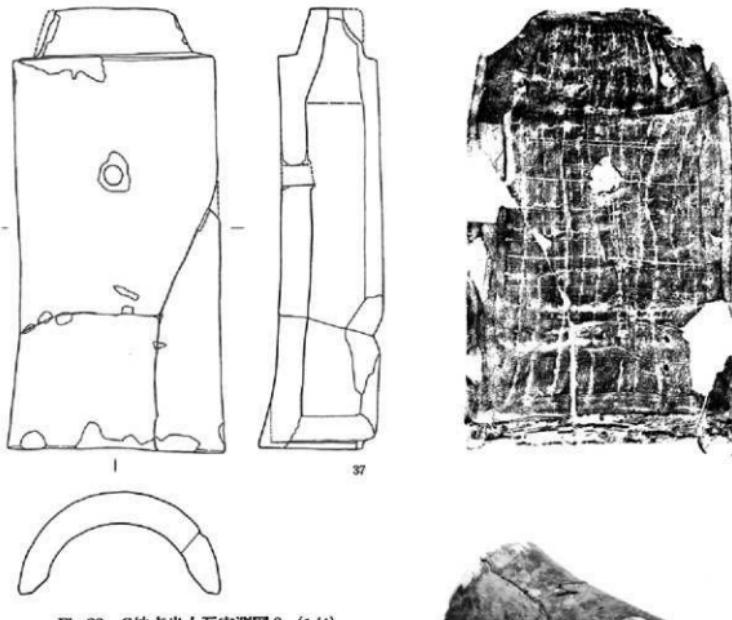


Fig.22 G地点出土瓦実測図3 (1/4)

らも唐花菱文瓦が出土していることから流行した文様との見方もされている。(高祖城 前原市文化財調査報告書第85集 2003)

丸瓦

下層の黄褐色土から出土した完形に近い3点を図示した。37は瓦当が剥離した丸瓦部分である。全長36.1cm、瓦当径17.5cm、文様区は径12.0cm前後、玉縁幅13.0cmを測る。丸瓦の先端には周縁と瓦当の両面に条線の刻みを入れた接合面がみられる。特に周縁と接合では周縁から丸瓦上部(凸面側)にかけて補強も兼ねて加厚され径が大きくなっている。凸面はナデ、凹面には布目を残し、コビキB類の条線が明瞭にみられる。38は復元全長32.0cm、39は完形で幅13.0cm、全長28.3cmを測る。38、39ともに先端を広く面取りし細めている。凸面はナデ、凹面は布目を残し、コビキB類の条線がわずかにみられる。

その他

40は上層の腐植土中から出土した軒平瓦である。遺存する文様は幅広い三葉文の基部と思われる。41、42は大手に続く壁の天場(襷)から出土した。41は巴文の軒丸瓦である。巴尾は比較的幅広く、珠文は断面半球形を呈す。42は三葉文と思われる中心飾りの基部から唐草文が伸長していく。反転の形状から12と同じタイプとみられる。

Ph.35 G地点出土軒丸瓦(丸瓦部)



37

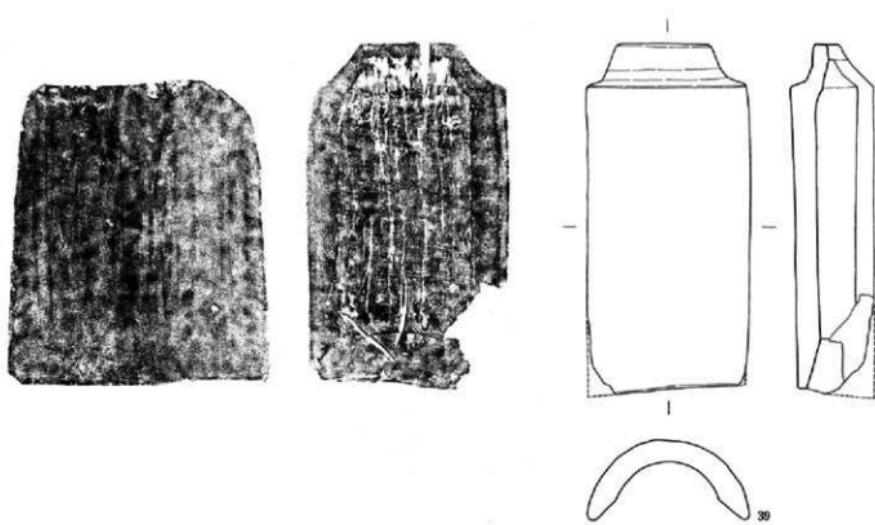
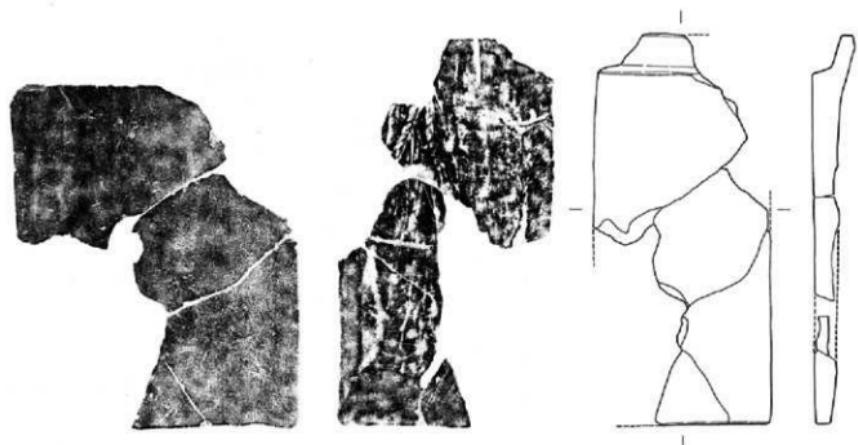


Fig.23 G地点出土瓦実測図 4 (1/4)



Fig.24 G地点出土瓦実測図5 (1/4)

表採資料

43~54は表採された資料である。

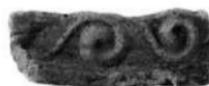
軒丸瓦 43は左回りの三巴文軒丸瓦である。文様区径10.3cm、周縁幅1.8cmを測る。巴頭は丸く、中央で近接している。珠文の間隔は比較的広く8個の配列が推定される。断面は球形であるが、低い。44は右回りの三巴文軒丸瓦である。巴頭は鉤状、珠文の間隔は狭く、断面半球形。丸瓦は周縁の背後から接合している。45の周縁幅は比較的狭く1.5cm程度である。巴尾は漸次細くなりながら長く延びるが巴尾同士は接していない。46は軒丸瓦の珠文のみ遺存する。

軒平瓦 47は中心飾りが三葉文の軒平瓦である。三葉文は写実的で稜が明瞭に通り、脇葉は上部で大きく外側に反る。遺存する唐草文は巻きが強く2回転に近い。周縁の上端は幅広く面取りされている。48も47同様に巻きが強い唐草文である。位置から2回転、3回転目と思われる。調査で出土した瓦中には類例がない。49は中心飾りの宝珠の下に棘が付いた短い支葉が付く。14、24に近いタイプである。50の下向きの三葉文には中心に葉脈状の筋を通している。唐草文は同じ上向きの反転葉を片側に2配列している。文様区の縁幅は狭く1.8cmを測る。51は中心飾りに橋の三葉を配し、そこから藤花文が伸長していくものと思われる。福岡城からも出土し、A地点出土の瓦同様に黒田の家紋を意匠したものである。52は左側縁が上方に立ち上がった隅瓦である。瓦当の文様は14、24、49と同タイプとみられ、4回転した反転葉間に小さな珠文を配す。

飾り瓦 53、54は既に国友千昭、中村修身両氏によって公表されている桐紋の飾り瓦である。右側葉には2箇所に欠刻がみられ、葉脈は中心から左右に各2本派生している。中心葉は右側葉の上に重なる。

花蕾は丸い唐花の花弁形である。中村氏はこの桐紋に秀吉との密接な関係を示唆している。

この他、近隣の方が採取されたものがあるが、紙面の都合で今回報告できないので次回に譲りたい。



Ph.36 G地点上層出土軒平瓦当

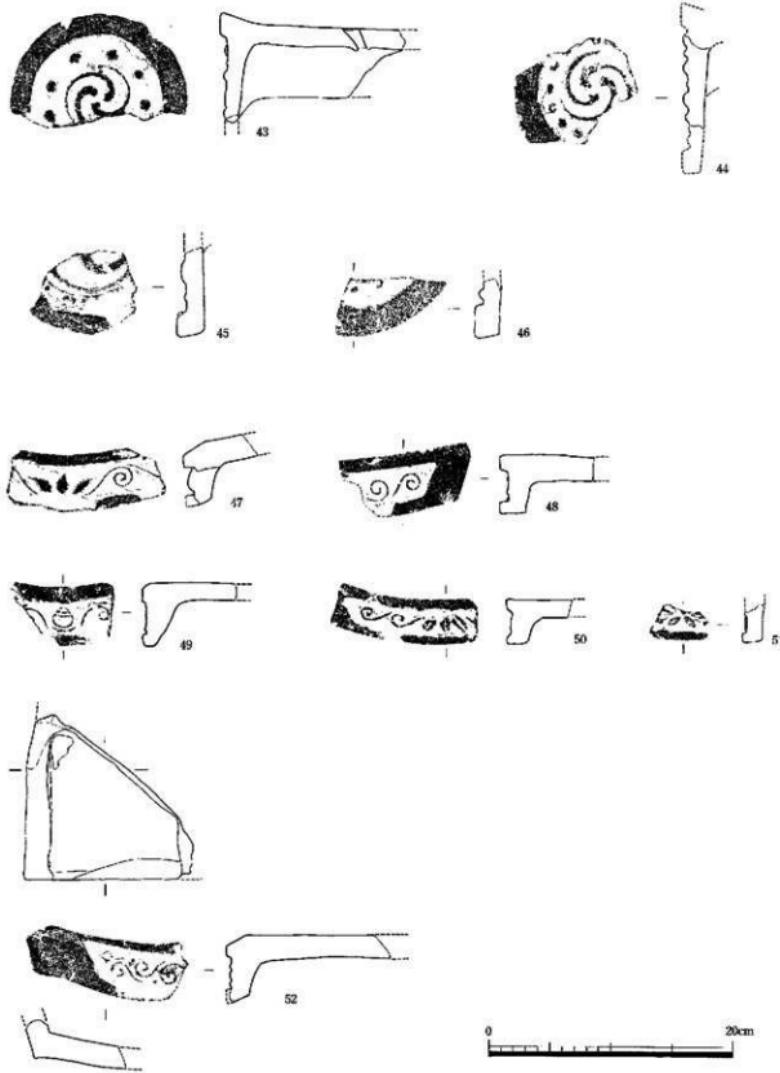
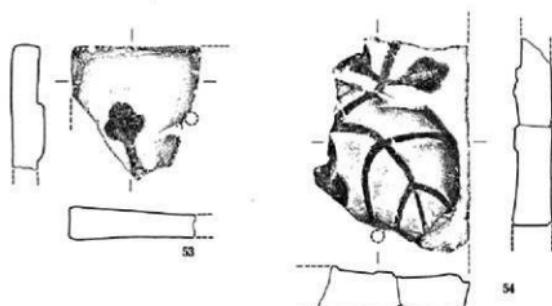


Fig.25 表採瓦実測図 1 (1/4)



Ph.37 名島城跡表採瓦 1



Ph.38 名島城表採桐文飾瓦



Ph.39 名島城表探瓦 2

この他、近隣の方が採取されたものがある。55も五三の桐紋飾瓦である。56、57は三巴文軒丸瓦である。巴頭が大きな円形でくびれが鋭い比較的新しいタイプと思われる。58は二重菊文の小振りの丸瓦で大棟の下に嵌めこまれた棟込瓦と思われる。59は黒田氏の家紋である3つ葉の楕を中心とした藤巴紋の鳥伏間瓦である。60は凸面に斜格子のタタキ痕を残す平瓦である。わずかに金箔が残る。朝鮮の系譜をひくものと考えられ、この他に名島城出土といわれる滴水瓦がある。61は違い輪の家の鬼瓦である。時期や所在などは不明であるが、名島神社に関連する可能性もある。

Ⅳ おわりに

宅地化が進み、名島城の面影が失われつつある中で調査地点である本丸は名島神社が隣接していることも要因となって比較的その形状を残し、まさしく最後の砦とも言えるかもしれない現状である。

名島城はこれまで断片的な資料や文献から城郭史上ばかりではなく、秀吉の朝鮮出兵に果たした役割からも歴史上重要な位置づけが考えられてきた。しかし、その実態は現在までほとんど不明なままであったと言わざるを得ない。今回、好機会を得て名島城の本丸を広く調査することができるようになり、その実態の一部を明らかにすることができた。調査は未だ継続中でもあり、ここでは2次、3次調査の概略をまとめ、今後の調査への課題を記することで終章としたい。

第2次、3次調査の成果として、まず、北辺、北西出角、南西出角、東辺の一部の墨線が確認できたことが挙げられる。安全上、石垣を露出することは困難であった箇所が多いが、北西部と大手では石垣の一部を検出することができた。石垣を築き、出角を造ることによって横矢掛けを可能にすることは近世城郭の特徴一つであり、今回、九州において最も早く用いられた技法を目にすることができた。特に、北東部へ張り出していく形状はⅡで述べた黒田城の絵図にみられる形状と近似し、築城以後に大きな変改があったことを窺わせる。

名島城は天正十六年（1588）に小早川隆景が築城を開始して以来、黒田如水、長政が福岡城の築城を始める慶長六年（1601）までの約13年間と短い間に隆景が隠居し小早川秀俊（秀秋）が統治した時期や秀俊が越前へ移封され、石田三成が筑前国代官となった時期、黒田長政が入城する時期などの画期に修復や改変が行われた可能性がある。特に第1次調査で出土した黒田氏の家紋瓦は長政が福岡城の築城にすぐ着手したにも関わらず、名島城の作事や普請を行っていた可能性を考えさせる。

また、第1次調査で検出された石垣根石の背後に別の石垣が埋められた状態で検出されたことや、詳細は後の報告にするが、4次調査でも北西出角で古い石垣が埋められている可能性がある遺構を検出したことからも改変が多く行われたことを窺わせる。

こうした改変の時期を決める為にも、出土瓦の検討が課題となる。特に黒田氏が抱える瓦師による瓦とそれ以前の瓦との間に技法の差異が認められる可能性がある。時期は遡るが瓦工人の動向では名護屋城との関係が重視される。これまで他の城郭に比べ名島城と名護屋城との同範関係が最も多いことが指摘されていた（Ⅱ章 宮崎博司1997、1999）が、遺物の項で述べた通り、軒平瓦瓦当に名護屋城出土の瓦と同タイプのものが出土し、同範の種類が増える可能性がある。名護屋城を支援する役割を担っていた名島城と同範関係が多いことは当然とも言えるが、その供給先として指摘されている博多との関係も重視される。先の乗安氏は（Ⅱ章 乗安 和二一 2004）博多で活動していた可能性が高い瓦工人は黒田長政入部後は再編され、黒田氏直系瓦工人の主導のもとに生産を行ったとする。名島城出土の瓦はそのほとんどがコピキB（粘土塊から瓦に用いる分の粘土板を切り取る際に鉄線状のものを使用して瓦に残った痕跡）であるが今後、瓦当文様ばかりではなく、こういった技法の面からも瓦工人の動向を検討していく必要がある。

課題の一つに検出された人手から先の入口の形状が挙げられる。絵図では平入りとなっているが、他の城郭例や地形から推定すると枠形の可能性も高い。

まだ、残された課題も多く今後の調査、整理に負うところが大きく、広くご指導を仰ぎたい。末尾で恐縮ではあるが、これまでも調査に關して多くの方々のご助言と御指導をいただいたが、特に名護屋城博物館の高瀬哲朗氏、北部九州中近世城郭研究会 会長の中村修身氏からは多くの御教授を賜り、記して感謝する次第である。

報告書抄録

ふりがな	なじまじょうあと						
書名	名島城跡2						
副書名	第2次・第3次調査報告						
巻次	2						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第938集						
編著者名	荒牧宏行						
発行機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区大神1-8-1 TEL:092-711-4667						
発行年月日	2007年（平成19年）3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
名島城跡 第2次	福岡市東区名島 1丁目2405外	40130	0115	33°38' 44"	130°25' 23"	20040701～ 20040901	公園整備
名島城跡 第3次	同上	40130	0115	同上	同上	20050411～ 20050621	公園整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
名島城跡	城郭	織豊期	大手石垣 隅櫓基礎	瓦 鉄製サキノミ	2次調査では本丸曲輪の北辺、南西出角の形状が判明した。3次調査では本丸大手石垣、北西出角の基礎が検出された。		
遺跡概要	城郭一織豊期一隅櫓基礎1十大手石垣 十北西出角石垣						
要約	調査地点は名島城跡本丸に位置する。2次調査では本丸曲輪の切上のラインが判明し北東に大きく張り出した絵図に近似した形状が確認できた。3次調査では大手側壁の石垣、北西出角の隅櫓の基礎部分が検出された。これらの遺構は九州において最も早く近世城郭の技術を用いたことを示している。						

名島城跡2

—第2次・第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第938集

2007年（平成19年）3月30日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区大神1丁目8番1号

TEL(092)711-4667

印刷 さつま印刷株式会社

福岡市博多区吉塚1丁目9-7

TEL(092)621-7055

